

家・庭
保・育・所
幼・稚・園



幼児の教 育



第八十一卷第八号
日本幼稚園協会

8

好評発売中

フレーベル生誕200年記念出版

フリードリッヒ・フレーベル

岡田正章編 対談者： 荘司雅子・平井信義・森上史朗・野辺繁子・宍戸健夫・海 卓子・東喜代雄・白川蓉子・藤井敏彦・利島知可子・西原新一・岩崎次男

A5判・344頁・定価 1,800円

幼稚園の創始者フレーベルの理論と実践を現代保育の立場から学ぼう。

フレーベルは子どもの幸せのために世界で初めて幼稚園を作った人として有名ですが、その実際の姿はさまざまにいわれて誤解を招いています。本書は現在の日本保育界に活躍される先生方に、フレーベルの子ども観、教育観などをさまざまな角度から議論していただき新しいフレーベル像を浮きぼりにしました。

フレーベルに還れ

長田新著 A5判・190頁・定価 1,000円

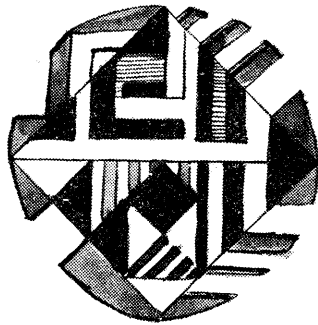
全国学校図書館協議会選定図書

フレーベルの教育目標は、知識の詰め込みではなく、技術を与えることでもない。子どもが内にもっている、何かを作りだそう、表現しようとする、その力を大切にはぐくむことに力点がおかれています。商業主義と結びついた英才教育や、小学校教育を先どりした準備教育が幅をきかせている今日の幼児教育界に、警鐘をならしているかのごとくきかれるのではないのでしょうか。幼児教育の父フレーベルの教育学のエッセンスがあますところなく解説されています。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育



第八十一卷 第八号

幼児の教育 目次

——第八十一卷 八月号——

© 1982
日本幼稚園協会

緑蔭図書……………和田陽平…(4)

緑蔭図書紹介……………中村弓子…(7)

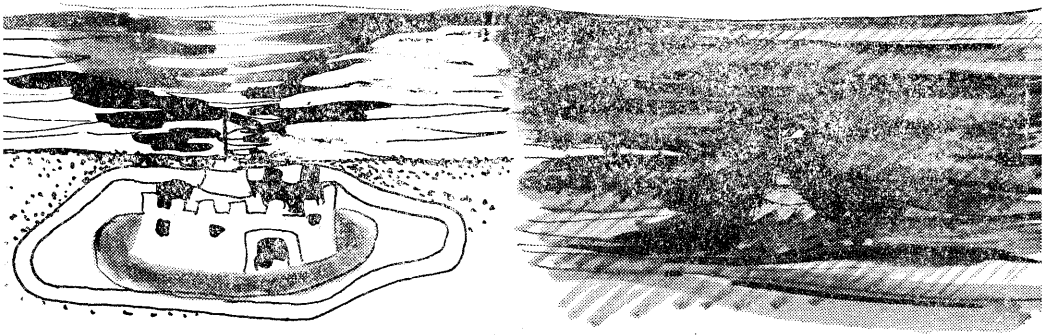
守永英子…(12)

小林彰夫…(15)

藤本美穂子…(20)

母の故郷 ⑤

——福永津義・人間とその仕事——……………高橋さやか…(25)



日本における最初の私立幼稚園とその背景 ⑤

——桜井ちかと桜井女学校附属幼稚園——……………小林 恵子…(33)

近代短歌に現われた子ども (三)……………大塚 雅彦…(44)

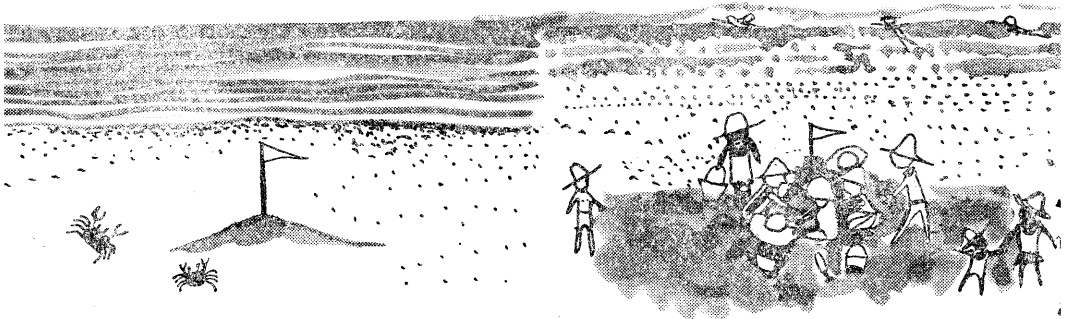
講演 お母さま方は太陽だ……………小林 つや江…(52)

史料紹介

『邦訳 日葡辞書』⑧

——わが国中世の児童文化史研究によせて——……………(62)

表紙 紙・うすい・しゅん
表紙題字・比田井和子
カット・福田理恵



緑 蔭 凶 書

和田陽平

夏の日には木蔭で屈託のない本を読む、これまた一楽ではなからうか。昨年夏は、私は岩波文庫の千一夜物語を読んだ。

私には子供の頃から何辺となく読み返した本がある。アラビアン・ナイト、森田思軒訳の十五少年、浅野和三郎訳ディケンズのクリスマス・カロール、湖南文山訳の三国志、口木山人そのほか訳の西遊記、それから漱石先生の吾輩は猫である。

私が幼い頃に読んだアラビアン・ナイトは子供向きのものであったが、千一夜物語は元来大人の読み物である。リチャード・バートンの訳は夙に有名だが、これには夥しい註と、まことに風趣豊かな挿絵が入っている。岩波文庫はフランスのマルドリユスの訳である。この物語は凶暴な王様シャーリアールが聡明な妃のシャーラザードの一千一夜のお話で宥められる仕組みだが、シャーラザードはその間に三

人も子供を産んでいるのに——何とそのうち二人は
双子ですぞ——シャーリアルは全くそれに気付か
なかつた位、間抜けな王様であるが、そんな事はど
うでもよろしいのであって、唯一つ一つの物語を染
しめば、それでいいのである。ここには近東の香り
高い空気がある。夏の夜、遙かにメソポタミアの乾
棗や柘榴の実の砂糖漬の味をしのぶのも、また一興
であろう。

十五少年は子供の読み物だが、森田思軒の雄渾な
訳文によって、大人の鑑賞に耐えるものになった。
冒頭の一節を引用してみよう。

「一千八百六十年三月九日の夜、彌天の黒雲は低
くたれて海を圧し、闇々濛々咫尺を辨ずべからざ
る中にありて、断帆怒濤を掠めつつ東方に飛奔し
去る一隻の小船あり。時々閃然として横過する電
光のために其の形を照し出ださる。

船は容積百噸に満たざるヨットの一種にして、
英国及び米国にて、スクーターと称する兩櫓的な

り。」

私の読んだ森田思軒の翻訳は、この十五少年と、
「間一髪」と言う題名で訳されたポオの *The pit and
the pendulum* である。訳文は雄勁な漢文調の文語
体であった。現在では共に絶版となり、手に入り難
いのは残念である。

三国志は勿論正史のそれではなく、小説の方であ
る。岩波文庫には小川環樹先生の立派な現代語訳が
あるが、私が少年の頃から愛読したのは元禄二年に
刊行された湖南の文山の訳したものである。この読
み本の文体には一種独特の魅力がある。

「女徳後を屹と見れば、その人身の長八尺、豹頭
環眼、燕領虎鬚、聲雷の如く、勢ひ奔馬に似た
り。乃ち立回てその名を問ば、答て曰、某は張飛
字は翼徳と云もの也」

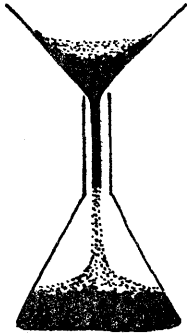
何か張り扇の音が聞えるような感じである。私は
この三国志を何辺読んだか知れない。

西遊記にも太田・鳥居兩氏の現代語の完訳がある

が、私が子供の頃から繰り返し読んだのは江戸時代に刊行された口木山人そのほか訳の絵本西遊記である。これもまた文体に特殊の魅力がある。

悟空は「大喝一声するよと見えしが、身の高さ一万丈、頭は泰山に似て、眼は日月の如く、口は恰も血池に等しく、牙は門の扉の如し。鉄棒を執て牛魔王を打つ。牛魔王角を以て是を架止め、兩個半山の裡に在って散々に戦ひければ、寔に山も崩れ海も湧返り、天地も是が為に反覆するかと夥し。」

まことに四大奇書の一、出てくるものはことごと



く化け物ばかりである。難しい漢字にくだけた仮名が振ってある。潑猴、獸子、姑娘、胡說事、罷了罷了、不敵、毛臉和尚、暴燥などなど、これが奇妙な面白い味を添えている。

漱石先生の吾輩は猫であるは、ここに説明するまでもないであろう。

私が少年の頃から、繰り返し読んだのは、こんな本であった。

五七、四、二十六

三つの出会い

中村弓子

今年四月二十四日の新聞は一齐に「アリの町」のゼノさん死去を報じた。このゼノさんをめぐる素晴らしい三つの出会いを語る二冊の本をご紹介します。

松居桃樓著『ゼノ死ぬひまない』（春秋社）

松居桃樓著『アリの町のマリア北原怜子』（春秋社）本書にはイタリア、スペイン、オランダ語訳がある。

ゼノさんはロシア領ポーランド東北の片田舎の農

家に生まれた。軍人生活をした後、一獲千金を夢みて様々な職業を転々とする放浪時代が続いた末に無一文になってクリスマスに家に戻るとゼノさんのことを心から心配していた母親の葬式が他ならぬその日にすんだところだった。聖書の喩えの放蕩息子と同じことになってしまったという思いと共に、何にならなくても良いから信仰深く天国に行く人間になつて欲しいという母親の願いがゼノさんの心に染みこんだらしい。その後間もなくゼノさんは修道院に

入ることを決意する。しかしまだどこか気軽なところがあり、あまり辛かったらこれも一つの勉強だったと考えて結婚しようと思っていられない。入る修道会も規律が比較的ゆるやかで服装も立派な会を選んだつもりだった。ところがゼノさんのたまたま廻された修道院では丸坊主にされてしまい、やる仕事は床掃除ばかりで憤懣やる方なく、まんじりともせぬある真夜中、とうとう院長のコルベ神父の部屋のドアを叩いて叫んだのだった。自分は女中じゃない、もう修道院を出て家に帰る、と。「この時コルベ神父が何を説き、ゼノさんが何をどう納得したのか、ゼノさんから聞くことはできない。だがそれはその時の印象が薄かったからではない。その時心に深く刻み込まれたものが何だったのか、彼は語る言葉を持たないのだ。(……)ゼノさんはこの夜を契機として一変した。この夜、心の底に触れた何ものかによって。それが何であるかを彼は生涯いうことはないだろう。名づけて呼びえないもの、名づければ

もうそれではなくなってしまうもの。ただ心から心に伝わることだけが可能なもの。その夜ゼノさんの心はコルベ神父のほほえみを見ただけだったのかも「しれない。」

後にアウシュヴィッツの収容所で一人の脱走者を出した報復として十人が餓死刑に選ばれ、そのうち一人が妻と子の名を呼んで彼らを残して死ぬのは耐えられないと叫んだ時、その身代りを申し出て死んでいったのが他ならぬこのコルベ神父であった。助けられた人ガイオニチュック氏はその時コルベ神父はほほえんでいたと語っている。

ゼノさんはこのコルベ神父に伴って長崎に来たのだが、教会の事業のために寄付を集める時「恥は自分のためにかき、寄付は聖母マリアのために貰え」と神父に教えられた。この心は終戦後の恵まれない人々に対するゼノさんの救済事業の中に生き続けた。

この救済事業の出発点はゼノさんの属する長崎の修道院が戦災孤児のために作った孤児院だった。そ

のための孤児集めをやっているうちにやがてゼノさんは浮浪児を追って全国を回り出したのだ。そのやり方は独特のもので、行く先々でアメを配りながら新聞記者に写真をとってもらい、その新聞記事を持ち歩いて材木集めをする、「その材木で家が建ちそれがまた新聞にのると今度はそれを持って役所に出かける。〈これほど地元の人々の善意が盛り上っているのだから〉と土地を手に入れる交渉を始めるのだ。ムダ弾は一発も撃たない。」こうしたやり方はしばしば売名行為と批判された。しかしそれをものともせず飽くことなく天真爛漫にそれを続けてゆくところにあの「恥は自分のためにかき寄付は聖母マリアの為に貰う」という信念が脈々と生きていたのだ。

ゼノさんはそうした救済事業のかたわらで一般人には「カワイソウナ人ノタメオ祈リタノミマス、聖母マリアサマ、オメグミタクサンアリマス」と言いながら手当り次第に聖母のカードを配っていた。あ

る日浅草の大きな履き物問屋から応対に出てきたお嬢さんがこうしたカードの一枚をゼノさんから受取った。それが北原怜子だった。ほとんどの人にはすぐ捨てられてしまうカードとゼノさんの言葉が怜子の心に深く残った。やがて新聞記事によってそれがアリの町の救済に一役買っているゼノさんであることを知る。ほどなくしてゼノさんがまた家の前を通るのを見かけた怜子は思わず雨の中を傘もささずにゼノさんを追い、迷い、ずぶぬれになってアリの町にたどりつく。怜子はマリアのカードを見せ、ゼノさんは怜子の澄み切った目を見て「この娘はただものではない」と直感する。帰りにゼノさんはわざと隅田川のほとりを遠廻りして怜子に野宿の人々を見せた。その日から怜子はゼノさんの片腕となってアリの町と周辺の浮浪者部落への奉仕生活に献身してゆく。

コルベ師とゼノさんの出会いもゼノさんと怜子の出会いも深い出会いに独特の美しい単純さに満ちて

いる。

しかしアリの町とゼノさん及び怜子との出会いは決して単純なものではなくそこには一つの実に緊迫したドラマが潜在した。

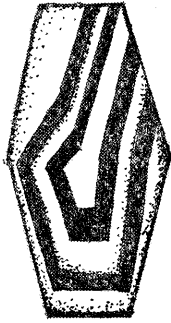
ゼノさんは例によって天真爛漫にアリの町にやって来て「アナタガタナニホシイデスカ、タベモノデスカ、材木デスカ」とやり始め、例によって新聞社を呼ぼうと言う。アリの町は浮浪者の巢ではなくバタヤをやることによって自力更生しようと団結している区域であったが一番恐れていたのは当局から立退きを命ぜられることであった。外人の宗教家が後援してくれるというニュースが出れば世論の支持を呼ぶのにこの上なく有難い。だがゼノさんからただ恵んで貰ったとなると自力更生と反対のことになってしまう。そこで仕方なくアリの町のブレンである「先生」と呼ばれる男が思いついた演出が、生活とは関係のない建物である教会を建てることについてゼノさんが協力を申し出たとして新聞記事にして貰う

ことであった。怜子が見たのもこの記事であった。

しかし「先生」はじめアリの町の人々はその場しのぎのこの演出のことをすっかり忘れてしまっていた。ところが半年ほどして建てた共用の二階家に対して都の役人から取り壊し命令が来た時、アリの町の人々とはとっさにあの演出の件を思い出しその屋根の上に急造の十字架をつけてまたその場をしのいでしまったのだった。教会も十字架もアリの町の人々にとっては演出であり方便であった。しかしその演出であり方便であったものがゼノさんと北原怜子という二人の人間によって逆転させられてゆく。ゼノさんの天真爛漫な信仰によって。怜子の絶対的自己犠牲の心によって。アリの町のドラマはそこにある。アリの町にかかりきりになった怜子は「先生」から、助ける人が上で助けられる人が下の「助けてやる」を自己満足で押しつける宗教家の慈善というものを情容赦なく批判される。そのつど怜子はそれを受け入れ引き退るのだが、引き退ることにその自己犠牲

は深化しました同時に相手をも変容させていったのだ
った。通いの奉仕からアリの町に住みこみ生命を燃
焼し尽すに至る怜子の歩みはシモース・ヴェイユの
工場体験における「受肉」と呼ばれたものをも思い
出させる。そして「先生」と怜子の緊張関係とそれ
故の最終的相互理解はヴェイユとテヴァン夫人のそ
れ、「プロレタリアートは選り取る状態ではありま
せん」という言葉をつきつけたテヴァン夫人とのそ
れをも連想させる。

この二冊の本に描かれた出会いの第三のもの、そ
れは北原怜子と「先生」のそれである。そして「先

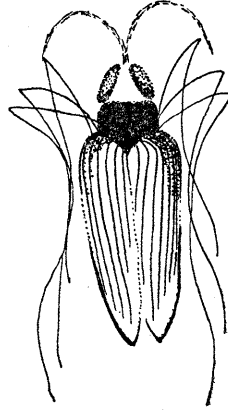


生」とはこの二冊の本の著者、松居桃樓氏に他なら
ない。

その松居氏は『北原怜子』増補版の序でこう言っ
ている。自分は長い間アリの町に住みわゆる「人
生のドン底」から社会事業家やボランティアを多く
見てきた。「そしてつくづく感じたことは《気の毒
な人を助ける人》はいくらでもあるが、その《気の毒
毒な人》を神だと思つて心から敬愛して奉仕する人
はめつたにいないということです。」

(お茶の水女子大学)

私は本を買うことが好きである。新聞の新刊案内や書評を切り抜いておいたり、ふらりと書店に立ち寄ったりして本を買ひ込む。しかし己れの力に余る向学心（？）のせいか、選ぶものは少々堅く読む方はなかなか行かない。次第に机の上やベッドのまくらもとに本が積みあげられて行く。つまり、あまり適任とは思われない積読家のささやかな読書のなかからの図書紹介である。



守 永 英 子

子どもとことば

岡本夏木著 岩波新書

子どもがいつのまにか、ことばを話すようになることを、私たちおとなは、自然で当り前のことのように思っている。しかし、「話せないもの」が「話すもの」になっていく過程は、子どもの側にたってみるかぎり、一つの大きい戦いであると著者は言う。子どもはなぜある時点にいたらないと、いわゆる

ことを話しはじめないのだろうか。その時点にいたるまでに、子どもの心のなかにはいったい何がおこっているのだろうか。ことばの獲得は何をその基礎工事として「必要」としているのか。そのことがここでの問題であり、本書のテーマのなかでも、もっとも重要なものとなるはずである——ここで私の興味は、ぐっとかきたてられる。子どものことばについて私が知りたいことは、統計的な平均値などではなくて、まさにこのことなのだから。

私たち教育現場の人間は、ひとりの人間としての子どもと向き合っている。一つの側面からだけ光を当てた専門家の研究は、現場感覚にはピタリとこないことが多い。著者は「ことばの発達」という限られた側面からでなく、子どもの全体的な発達のなかでのことばの獲得のしくみを浮きぼりにしてくれる。外からの刺激としてのことばを、そのまま機械的に写しとっていくのではなく、人びとのかかわりあいのなかで子ども自身が自分の能動的な活動を

とおして自分のものとしてゆくことは感動的である。追跡研究の資料もおもしろく、「ニャンニャン」の記号化過程など興味深い。

著者の視点は、さらに、ことばが氾濫はんらんしている現在の社会状況、文化状況と、子どものことばの問題にひろがっていく。著者が示している「言語の繁栄」現象のなかでの「ことば」と「人間の心」の乖離かいりの問題は、教育にたずさわる者が深く考えなければならぬ大きな問題であろう。

新しい育児と教育

——在アメリカ精神科医の提言——

中久喜雅文著 弘文堂

日本とアメリカという二つの国で、家族とともに日常生活（友人とのつきあい、子どもの育児や学校生活への関与など）を体験し、両国で精神科医としての研究と精神的診療を行ってきた著者の、両文化についての洞察である。しかし、ただ文化の差

異についてはなく、精神科医とし、そのうらにひそむ心理的意義を精神分析的に検討し、ことにそれを乳幼児の育児、教育などとの関連においてとらえた点に興味をそそられる。

全体の構成は、一、文化のちがひ 二、心理のちがひ 三、精神病理のちがひ 四、精神療法のちがひ 五、日本文化とアメリカ文化の統合をめざしてとなつてゐるが、はしがきにもあるとおり、例が多く平易な日本語で書かれていて読みやすい。「他」を知ることは、より深く「自」を知ることにもつながる。アメリカと比較洞察することで日本における育児、教育を考えなおすきっかけにしたいものである。

少年期の心——精神療法を通してみた影——

山中康裕著 中公新書

何年か前に読んだ本であるが、図書紹介をといわれるとなぜか心に浮かぶのは読んだあとのさわやか

さのせいであろうか。

この本は、精神科医としての著者が、精神療法という仕事を通してかかわってきた少年や少女（七歳から十五歳）の記録であるが、著者のクライエントに対する人間としての尊敬と愛情が、この本を医師の症例報告に終わらせていない。著者は精神症児たちに暖かいまなざしをそそぎ、神経症や精神症患の大きな部分がその個人の所属する「場」の持つ病理のしわよせの結果出てきたのだという考えを支持する。彼等は家庭や社会、つきつめて言えば、ひとつの時代を映し出す鏡であり、次の時代を考えていくのに一つの大きな指針を与えてくれる貴重な「生き証人」と考えるのである。

それぞれのケースはかなり特殊にみえながらも私たちが心ひかれるのは、著者が言うように、実はみんながこうした要素を自分の中の「影」として含んでいるものだから「なのであるうか。興味深く読める本である。（お茶の水女子大学附属幼稚園）

書評 「逆転！ 食べもの常識」

田村真八郎、宮崎基嘉 編著

ダイヤモンド社刊、初版昭和五七年二月

900円 240頁

小林 彰 夫

今から十数年も昔の話になるが、私共夫妻は、幼稚園の長男をつれて、米国東海岸の大学都市、ケンブリッジ市（広義ではボストン地域）に留学していた。そこで次男を生む破目になったのだが、どうせ珍しい経験をするなら、一流のところに行しようというので良い産科の先生を紹介してもらい、ハーバード大学と深い関係のある産科専門の病院に入ることにした。その時お医者さんや看護婦さんに、色

々教えてもらったり、こちらの状態も英語で説明しなければならぬので、お産と育児の英語の勉強にと家内と二人して当時アメリカで育児のバイブルとしてもはやされていたスポック博士の「Baby and Child Care」（後に日本語訳で「スポック博士の育児書」として出版されたことは皆さん御承知の通り）を読んだことがある。細かいことは忘れてしまったが、その中に育児の心掛けとして、「育児書通

りきちんとしなくてはとイライラするより、少し間違えたり手抜きをしてもよいからノンビリと愛情をもって赤チャンを見守ってやりなさい」といった言葉が今でも記憶に残っている。

何故このような昔話しをしたかという点、およそ我々の衣食住、生活にかかわる情報が最近、「こうあるべき」、「こんなことをしたら大変」、「恐ろしい何々」とストレスを高める方向にばかり走っているように私には感じられるからである。もちろん、最近の科学的成果から次々と新しいことが生活の問題としても明らかにされていることを、特に家政学部に身を置くものとして認めるのにやぶさかではない。しかし細かいことに気を配りすぎて大切な全体を忘れることはそれ以上に不幸なことである。育児書のルールに足をとられて、個性のある自分の赤チャンの全体を忘れてはいけない様に、様々な生活に関する科学情報にまどわされて、自分でしか作り得ない自分の生活を忘れては何の意味も無い。特に食

物については、いわゆる公害問題とからんで、多くの心配を我々はかかえこんでいる。また一方であり余る食品の群を目の前にして、何か頼りになる選択の基準を与えてもらいたいと願うのも人情であろう。こうしたことを背景に安全な食品を求める心情が自然食運動となり、何を食べようかと迷う気持が、健康食に走るのは当然の結果かもしれない。いわゆる工業化された画一の生活に対してこうした批判が生れるのは偏ったものを直そうとする人間の正常なバランス感覚であり、人間が存在して行くために大切なことであるが、こうした運動が商業主義と結びつくと余り感心した結果にはならない。

例えば最近巷間に流布されている「砂糖は体に入って酸性になるから骨をとかす。骨の丈夫な子を作るために砂糖を食べさすな」という説がある。しかし砂糖が体に入って酸性になることも、そのため魚の骨を酔につけて軟らかくなる様なことが体の内で起ることも科学的には全く根拠の無いことである。

強いて砂糖のために骨が弱くなる理由を考えれば、砂糖は甘いものの食べすぎで食事としてとり入れる栄養のバランスがくずれ、その結果骨も弱くなるということであろう。またある健康に熱心な人達の中には「理屈は間違っている、結果がよければいいではないか。砂糖を追放して健康にマイナスになることが無く、今かかえている問題がいくらかよくなるならそれでよいではないか」と主張する人がいる。しかしこれこそ生活の全体を見失っていることで、砂糖だけを追放したら健康もいくらかよくなるといった怠惰な考えでは真の健康生活は得られない。我々の食生活というものは、数多くの食品中の栄養素が複雑に歯車の様にかみ合っていているものなのである。何か特定の食品が薬で、他のある食品が毒というものではない。ではこうした誤った食物の不安情報はどうして見分けたらよいのだろうか。結局他人の言葉にまどわされず常識豊かな生活感覚で自分の生活を見つめることが第一であろう。

しかし大学教授などの肩書きで自然食のPRなどをされると、その著者が実は栄養とか食品といったことにズブの素人であっても、つい信用したくなる。こうして世の中に定着してしまった誤れる常識については、やはりその道の権威が、易しく正しい考え方を教えてくれるより他に途は無いであろう。

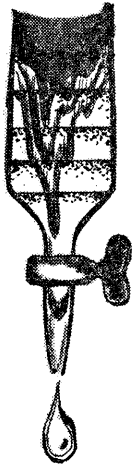
前書きが長くなってしまったが冒頭に推薦した本は、以上のべた私の要求を全ての面で満たしてくれる。著者の田村氏は農林水産省食品総合研究所の室長であり、宮崎氏は国立栄養研究所の部長で共に食品栄養問題で現在我国の第一線で活躍されておられる学者である。本の序のところで断られている様に、実際には上記の二つの研究所のスタッフが多数参加されて、各々の専門の立場から書かれているが、それというのも本書の題名の「逆転！食べもの常識」をそのまま構成に生かして「第一部間違だらけの食べもの常識」では、一般の人が信じている誤った常識が、ひとつひとつ小テーマとなりそれを

各々の専門家がいかの間違っているかを解説する形式になっている。眼につくままにテーマをひろってみると「タンパク質はおいしい」「酸性食品とアルカリ性食品とでバランスをとらねばならない」「天然物は安全で合成物は危険である」「有精卵のほうが無精卵よりすぐれている」「海藻はヨウ素があるから食べた方がよい」「欧米先進国型食生活のほうが健康によい」これらが皆誤った常識だと分った時、読者の皆さんはどんな顔をされることだろう。もつとも、このテーマの全てが栄養的に否定されているわけではない。例えば「海藻は……」のテーマでは、ヨウ素よりも、他のミネラルや食物せんいが栄養学的に重要な意味をもっているという解説であり、むしろ海藻を食べることは積極的にすすめている。

ひとつのテーマをほぼ二頁で、専門家が正確に、良心的に解説しようというのだから、どうしても専門語が出て来て、一般の読者になじめない個所が出る。

てくる。そのため欄外に解説の項をもうけているが、ここに記載されていることが全て理解出来たらその人は相当栄養学を科学的に解説出来る人といえよう。完全に理解しなくとも、誤れる食物情報から解放され、ストレスの解消になるだけでも意味があるのではなからうか。しかし何といっても個々の解説を各人が行っているので統一的に栄養や食べ方を理解するわけには行かない。それを考えてか、第二部は宮崎先生の個人執筆で「食べ方と栄養の常識」となっている。グラフや表も多用して、何とか素人の人に現代の栄養学から見た我國民の栄養状態とその食べ方を解説しようと努力しておられる様子がよく分かる。新書版の本を読む人にとっては、やや固い話であるが一部と二部を照応させれば、栄養の常識は自ずと身につくはずである。第三部、「食べもの情報とのつきあい方」は編集部の記者がまとめたもので、一部二部の総括を旨指したのかもしれないが、頁数も少ないなかに、色々なケースを取り上

げ苦心の跡はみられるものの、やや浮き上った感じが私にはした。第三部のテーマだけでも一冊の本となる重みのあるものだけに、食べもの情報がどの様な過程で作られ、それが社会にどのようなインパクトを与え、我々消費者がどのような反応を示すかを具体例をあげて追跡し、その教訓から我々が、誤った情報と正しい情報をいかに見分けるかの指針を与えるような本が、本書の続篇として現れることを期

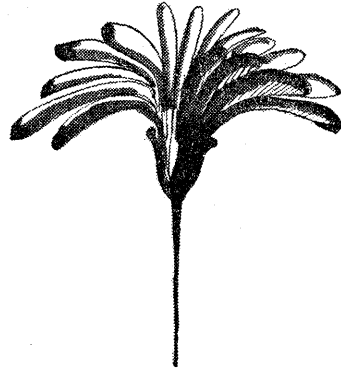


待したい。

この小文を読まれる方々は、幼児教育の専門家と
うかがっている。幼児の心とからだの発達、が車の両
輪の如きものであることは、素人ながら私も理解し
ているところである。からだを健全に発育させるた
めの食物は、幼児教育家にとって無縁ではないと信
じ、あえて解説を試みた次第である。

(お茶の水女子大学)

私は児童文学、児童書と呼ばれるものを、「子ども達に読んであげる」ためには決して読むことはありません。いつも自分の楽しみで読みます。けれども心楽しい絵本やお話に出会いますと、子ども達にすぐに話してあげたい気持ちになります。この本もそんな気持ちにさせた一冊です。子ども達に話してあげるには少しむづかしいかもしれませんが、



藤本美穂子

「ヴァイオリン」

R・T・アレン 文

G・パステイック 写真

評論社

私の育った若狭の街には二本の美しい川が流れています。そのせいか、水のある風景に出会いますと、とてもなつかしい気持ちになり、ごく自然にバロックのあのなつかしい旋律があわせて思いうかびま

す。この絵本も、水のある風景が舞台で、音楽が関わっています。そして仲の良い二人の少年と、老ヴァイオリニストのお話です。

少年のひとりはお母さんに連れられていったコンサートで、自分よりも年下の少年が弾いたヴァイオリンの音色が忘れられなくて、秘かにヴァイオリンを手に入れようとお金をためています。小銭をためるびんがとうとういっぱいになった日、少年は友達と目ざす店に行きますが欲しいヴァイオリンは高価すぎて手にあいませぬ。店の主人は古びたヴァイオリンをさがし出してこれならとわけてくれます。でも欲しいと思っていたものとは随分ちがいます。弾いてみても耳をおさえたくなるような音しか出ませぬ。少年はこのヴァイオリンを公園のくずかごの中に捨ててしまいます。そこへ老人がやってきてヴァイオリンを見つけて弾き出します。そのメロディや音色の何と美しいことか。ヴァイオリンを持ち帰る

うとする老人に、二人の少年は訳を話して返してくれるように頼みます。老人はヴァイオリンを磨き調弦することを約そくします。老人は「……気持がよくて親しみやすくほんのちょっとだからしない家……」にうさぎ一わ、鳩一わと暮らしています。

老人はそれから少年にヴァイオリンを教え始めるのです。少年は音楽を知っていくと同時に老人を理解していきます。

ある日少年達は橋の上でひとりはヴァイオリンに、ひとりは魚釣りに興じています。釣糸が引くのを見て、少年はヴァイオリンを投げだし友達が釣り上げるのを手伝おうとします。けれども年下の少年は自分の力だけで釣り上げたかったために少年を押しのかます。その拍子に少年は自分のヴァイオリンの上に倒れヴァイオリンは無気味な音をたてるのです。沈みこんでしまった少年を助けることのできるのは老人だけだと、老人に友達は助けを求めます。老人の家のドアには張り紙がしてあり、全部を読み

取ることはできませんが、老人がいなくなるらしいということを感じます。大きなスーツケースを持ち、鳩のかごを体につるして出かけつつある老人を見つけて、友達の小さな少年は訳を話します。老人は考え考え少年の座りこんでいる橋の階段をのぼってきます。そして老人は何よりも大切にしているヴァイオリンを橋の階段の下において立ち去るので

す。
友達からドアに張られていた手紙を見せられ、老人が行ってしまうことを知った少年は老人の後を追います。けれども老人はすでにボートにうさぎと鳩をのせ、ピンクのかさで日陰を作ってやりながら、もう声の届かないところまでこぎ出していたので。少年は老人に心を届かせることのできるのはヴァイオリンしかない、一度はもう決して弾くまいと思つたヴァイオリンを、そして初めてのヴァイオリンを心をこめて弾くのです。

この本を読んで興味深く思えることがいくつあります。その一つはこれは絵本なのですが、絵ではなく写真が使われているということです。二人の少年も老人も、ヴァイオリンもピンクのかさも、小銭のつまつたびんもみんな写真なのです。この写真がとてもよく、少年や老人の気持を語っています。悲痛な思い、あたたかさ、やさしさ、又激しさを。

例えばヴァイオリンがこわれてしまった後、少年は「……『ぼくはこれっきり、もうヴァイオリンを弾かない』と書いてそれ以上一言だつてしゃべろうとしなかった……」という一節がありますが、私は写真を見ないで言葉を読んだ時、とても投げやりな怒りの勝つた言葉として読みとつたのですが、写真を見て、それは決して怒りではなく、言葉では語れない程の悲しみのこもつたつぶやくような言葉であると理解できたのです。

又最後の場面で、波打際から少年は心をこめてヴァイオリンを弾きます。次の頁は哀しみのある、そ

れでいて顔中をほころばせている老人の大きな顔写真です。これがあることで私はどんなに慰められたことでしょうか。

他にも美しい写真がたくさんあります。

通りに面したウィンドウに飾られているヴァイオリン。……とりたての栗の実のようにつやつや光っているヴァイオリン……

雪の舞う中で少年達は老人のかなでる音色に聴き入っています。……ふりしきる雪のなかに舞いあがってゆくメロディ……

どうぞ言葉を読みながら、丁寧に写真をごらんになって下さい。言葉のもつひろがり写真を充分にうけとめて、それに応えてくれています。

しかし私がこの本で一番心魅かれたのは、老人の生き方についてなのです。

音楽を愛したために、老人の過去には不本意なことがあったかもしれない、だからこそ老人が少年にかける期待や希望には、はかり知れない夢があった

はずなのです。けれども少年がヴァイオリンに夢中になり出したその時に老人は身をひくのです。私はそこに深く心動かされるのです。

老人は少年と出会ったその時に、同じ世界に住み、同質のものに愛を寄せる心の通いあう相手であると理解したはずです。そしてヴァイオリンの手ほどきをすることは老人にとっては何よりの慰めであり、楽しみであり、生きがいであったにちがいないりません。老人はしかし、音楽を知る故に、自由の意味を理解するが故に、子どもを深く愛するが故に身をひくのです。この少年に無意識のうちに、自分の願いを押しつけることになりはしないかと恐れたのです。老人は少年達に気づかれないままにそっと立ち去ることを願っていたのですが、思いがけない事件のために、老人は自分のしようとするに、より明らかな選択をせまられるのです。つまり自分の分身のように大切にしてきたヴァイオリンを少年に手わたすこと以外に少年の傷ついた心を救う方法は

ない。けれどもこのヴァイオリンを老人がどんな思いで大切にしてきたかを少年が知っているだけに、これを手わたすことは少年に恐れている生き方の押しつけになるのではないかと。

『ほら、これからはこれが君のものだ。わしは別のを手に入れるさ、いつか。だが君がヴァイオリンを続けるかどうか、まして立派な演奏家になるため一生懸命練習するかどうかきめるのはクリス、君自身だ』

人生を先きに歩んでいるというだけに、体験や経験が豊かであるということで、子どもに対した時、

おとなである私達は何かと教え導こうとします。おとなが善かれと思つて行為するなかで、子どもに実はおしつけになつていけないことがあるでしょうか。おとなが子どものためにしてあげることがはたしてあるのでしょうか。

私はこの疑問にこの本を通して出会えたことをとても幸わせに思います。抑圧のない、限りなく自由な中で子ども達には自分の生き方を、自分で選ぶと欲しいと願つてはいますが老人のような生き方が、はたして私にできるでしょうか。

(大阪市長居幼稚園)

母の故郷ふるさと ⑤

— 福永津義・人間びととその仕事 —

高橋さやか

(Ⅳ 承前)

五月から次第に自己の外へと心をひらき、活動を発展させた子どもは、七、八月（夏休みの時間も通って）に至って、外なる世界を自分の内なる能力と自分の方から結びつけ、自分のもの（能力範囲の内なるもの）として獲得するまでに成長した。

一年の歩みの第二期がはじまる。

「ふるさと（故郷）」 九月の主題は、一人ひとりの人間の、（個体の）外界と内界との接点である。それはまた、生れる前なる過去と生後の現在との接点でもある。「遊び場所」において、外とかかわる自己を確立した子どもに、再び、自己内部への沈潜、自己確認を期待する津義の心意がここにみとめられる。夏休みに里帰りをした家庭もあろう、祖父母や父母の生地（実家・本家）の人々との親しい交流を経験した子どもも多くいるだろ

う、祭など郷土的な年中行事も夏には多い。昔話や民話などに親しむ機会にも恵まれるであろう、……九月、園生活に戻って、夏休み中の報告——おみやげ話が弾むうちに、なりゆきとしてもスムーズに、「ふるさと」は子どもの意識の中に定着することが期待できる。自分自身の出自に親しむことは、それだけ、主体意識を充実させる。

十月、体育の季節でもあるが、充実度を高めた一人ひとりの子どもが、自分のことについて自分で気をつけ、処理できるようにする、——一人ひとりが「わたしのからだ」を考え、大切にし、自分のことは自分で責任をもつことができるように、津義は期待する。

このように一人ひとり独立の能力を獲得してはじめて、自信を以て自分が自分であることにおいて協調協力が可能になる。

自他間でよいかかわりあいを成立させ得るとき、ひとは感謝の心をもつ。感謝の心が具体的な行動——活動に実現するとき、そこに奉仕活動が生れる。奉仕活動は感

謝の具体的表出にはかならない。

十一月の主題「橋」は、距りを結ぶものの象徴的な実在である。感謝の発動としての奉仕が、生活における人間同士のかかわりあいのよりよいあり方に向ってなされるとき、その奉仕活動は、とりもなおさず「橋」の役割を果すことになるであろう。距りを結び繋ぎとめ、かかわりあいを育てかつ守護するもの、それが橋の役割である。

人間の中に生れた最高の、また最も純粋な奉仕者、神から人間に架けられた橋、それこそキリスト——イエスである。その誕生をよるこび祝うクリスマスは、人間の側からの感謝の出発点であり、そして到達点でもある。

十二月は「クリスマス」の月である。クリスマスを迎えて、子どもは、今や自分に働きかける神の愛を見定め、四月、母を、身近な具体的な保護者保育者を通して受身な形で愛を識った子どもは、クリスマスを迎えて直接に、愛である神へ、自分の方から思いを致すところまで歩んだ。

第二期「感謝(奉仕)」の主題がこうして達成される。

子どもの友、貧しい者病む者悩む者の友、そのイエスを識り、イエスに従って、イエスによるこぼれることを自分のよろこびとして奉仕活動の実践にいそんだ子どもは、自分の働きが、他のよろこびを生み出すことを経験する。サンタクロースはほんとにいたし、いまでもいる。人に知られないように奉仕活動を実践——イエスに従う実践をする者がサンタクロースであり、イエスの分身(になり得た者)である。

他者によるこびをもたらし、他者のよろこびを生み出す経験をすると、子どもは、活動し働くことの価値を実感する。それは、疑問の余地のない自己の存在意識の確認につながり、最早動かされることのない自信——自己充実に満足となって自分自身に帰ってくる。

第三期の主題「希望」は、この確かな自信に支えられて出発する。

新年は、「時」を意識する節目まじめにも当っている。自信を確立した主体者の活動は、時間と空間の中で展開される。

る。

一月の主題が「時」であり、二月の主題が「わたしたちの国・世界・地球」(今日では「宇宙」まで広げるべきであろう)であるのは、主体的生活者・子ども、が対応すべき時間と空間を指向するものである。

三月「よい子ども」——一人ひとり、その年齢の子どもとしての人格の達成、を以て一年が終る。

自己の発見——対人関係の発見——対自然関係の発見——生活の場の獲得——内省(再度の自己指向)——主体的独立の確認——かかわりあいの理解とよいかかわりへの指向——役割活動・共同意識による活動——自己充実の達成——時間への対応——空間の認識——至った段階における人格達成……やや今日風に言い換えれば、このようにもいえようか。津義によれば、三歳児は三歳から四歳へ向う段階として、四・五歳、五・六歳はその段階として、それぞれ年齢相応のあり方において年度の始め四月から、年度の終り三月にかけて、以上のべたような生活意識(意識的な確認における活動)を重ねるので

ある。

限られた時間とスペースの中ではつくしかね、舌足らずな表現に終るほかはないが、この観応の移行と、それが（ここにはふれ得なかつたが）具体的な生活活動を以て充実現されるものであるところに、フレイベリアン福永津義の真面目は十分にあらわれている、と言い切つてよいと思う。四月のみならず、すべての月は主題聖句を伴つており、聖句は内容的に同義のものを、年級によつて長さや用句を変えてあげている月もある。月主題はただムード的指向を示すものではなく、実際活動について、それも、遊戯・歌唱・談話・観察・工作（作業を含む）、の五項目（大正十一——一九二六——年勅令を以て制定された幼稚園令による五項目。ただし、歌唱は唱歌であり、工作は手技であるが、当時小学唱歌というようない方もあつて唱歌という歌曲教材をいうような感じになり、教材を重んじるのでなく歌うことそのこと——活動——を重んじる気もわから、歌唱、の語を用いた。手技、も、手先のみを使う技術訓練、のイメージを

嫌つて、工作、の語を用いた。）にわたる活動の展開においてとりあげられる、というより、活動の展開が主題に
応じて計画・設定されるものであつた。主題聖句のあげ方もそうであるが、この五項目にそつた活動内容の設定にも、年齢（年級）に
応じてのあり方は、明確にふまえられていた。アイデアリズムが色濃く出ているとはいへ、津義の「系統的保育案」は、子どもの実態に即応した生活的現実対処的な具体的実践プログラムとして構築されていた、と言うことができる。

主題に貫かれることにおいて甚だ独自に「系統的」であり、二年級（三歳―六歳）共通主題による活動の設定において今日でいうたて割一貫教育的である。五項目のとりあげ方においては相関型であり、実践形態からは生活経路型＋プロジェクト・メソッド型である。年齢的適応を重んじることでは発達指向型である。そのような園生活の計画理念としての「愛と信頼・感謝と希望の生活」であつた。

V 「母の歌・母と子の遊び」

フレーベルの「人間の教育」の、幼稚園生活における実践的集約が、「愛と信頼・感謝と希望の生活」であるとすれば、「母の遊戯及び育児歌」＝「母の歌と愛撫の歌」は、もともとが母のための生活活動指導書であるから、津義にとってそのものずばり、直接の全生活――母として保育者としての生活の規範であった。津義の生活は、子どもとの対応によって充足されている。

『来れ（いぎ）、我らをして子らに生かしめよ』＝『さあ、子らに生きようではないか』というフレーベルのよびかけに、津義は、全身全霊をあげて共鳴した。その共鳴はそのまま、「母の歌・母と子の遊び」そのものに現出された。

津義の精神は、フレーベルとともに、そして聖書・ルカによる福音書第一章四六節～五五節とともに、母の歌、神によって子を宿し、育てる者として選ばれた者の神への讃歌を歌う。

「フレーベルは男性なのに、どうしてこんなに母の心を歌い得たのだろう。歌わずにはいられないほどに母の心を自分に感じることができたのだろう」津義はしばしば、感にたえぬようにこのような意味のことばを語った。津義によれば、フレーベルの方が「母」に共鳴しているのであった。そして、津義自身、フレーベルと共に「母の歌」をうたい、「母と子の遊び」に専念した。自分がそうしたばかりでなく、これまたフレーベルにならうて、知る限りの母たちに、「叡智ある母」として「天職」の自覚に生きることを、語りかけ、問いかけ、共に「子らに生きる」ことをよびかけつづけた。それは唯一なる真理を頌ち合うこと、神がそのように具えられたはずの、母が母としてそうあるべき幸福、を頌ち合うことであつた。

フレーベルは、幼稚園を単なる教育機関・教育施設として創始したのではなかった。むしろ、母を母たらしめるために、その母の育てのわざの場・家庭を家庭であらしめるために、家庭とタイアップする子ども（まご）の園として

幼稚園を（家庭に對置させるように）設定したのである。幼稚園は子どもの教育の場であるよりも、母たちの教育の場であるべく考えられている。園は、子どもにとっては、活動の場、生活の場、成長の（生長するための条件を保障されている）場、である。

そして、幼稚園は、母にとっては子を識る生活の場、母であることの自覚を与えられ、支え援けられる場なのである。

津義は、フレーベルの幼稚園をそのように理解していた。（筆者などはこの稿を書くことによってはじめて明確にこの事実をさとることができたようである。津義は、さきにも記したように実に、母の会活動に熱心であった。幼稚園にかかわっている間、必ず母の会を盛りたて、その集会活動は、月例会（一応全員出席が原則の）はもちろん、より／＼の有志の研究会、おしごと会、もちよりの会、等様々の形で——母親たちは出易い集りに出ればよく、無理のない、気安い、十数人から三十人くらいがいつも集りをもっている、というような——いつも

活気あるものであった。そのような母親たちとのかかわりあいには、今にして思えば、まさしく、幼稚園のあり方の、それが本流だと考えていたのに違いないと思われる。不肖の娘は、子どもとの活動は好きであったが、「母の会」は年久しく苦手であり、それを標榜して憚らなかつた。この点だけでも後継者失格である。）

自分自身を先頭者とする母親教育（の歩み）のテキスト、羅針盤、実践的課業解説書が「母の歌・母と子の遊び」である。

「母の遊戯及育兒歌」「母の歌と愛撫の歌」——前者は、A・L・ハウの訳書名であり、後者は茅野蕭々、莊司雅子両大家が採られた訳書名である。筆者などは、ただこれら先師に学ぶほかはないのであるが、福永津義のうけとめ方に即していえば、「母の歌・母と子の遊び」というのが適っているように思われる。

津義は、最初の著書（盾雄との共著）「幼児教育の実際」それにつづく「子供心」そして戦後の「愛母通信」、遺稿「母の書」……これらすべてに、くり返しくり返し

「母の歌・母と子の遊び」を叙述べつづけた。初めの二冊は、津義自身未だ若き母であった時代の「母と子の遊び」の実践報告であり、彼女自身の「母の歌」である。「愛母通信」は、やや間接的になるが、それでも随時随所に「母の歌・母と子の遊び」が顔を出す。書簡の形をとる随筆になっている。そして、(筆者がなお原稿のまま温存している)「母の書」は、最初で最後の『フレーベルの「母の歌と愛撫の歌」』の津義流の、——彼女流に密着詳細を尽した解説……活水卒業以来五十有余年にわたる講義講話録の整理集大成、といえる書である。(「母の歌と愛撫の歌」は多く茅野訳によっている。莊司訳は見ないまま逝ったので) いずれこの「母の書」だけでも、筆者自身世に在ることを許されている時間の内に上梓できるよう願っているが(できれば既刊書もあわせて著作集としたいと願っているが) ここではその冒頭のみを掲げることにした。

††

「母の歌と愛撫の歌」(一八四四年)は、彼の哲学的

教育学の基礎づけである「人間教育」公刊におくれること一八年、哲学的宗教的基礎に立っての彼の教育体験の果実を、母と子の実生活の中に収め得た、いわば彼の教育応答の歌ともいべきものでしょう。

また、四六時中、子どもとは離れられない母親が、そのときどきの子どもの表情や仕草にひきこまれて、何の意識すらもなく、語りかけたり、世話したり、日常茶飯事のことども——母の本能的なもの——を、彼フレーベル自身の目と心とでとらえ、それを母の叡知にまで高めようとの、育児開眼の書ともいえましょうか。

さらに、これは彼が期待した人間像——宗教と科学と芸術、神と大自然と人間、この三大協調・協和に生かされ、生きる、人間——が開発される場、その起点は家庭であり、その保育教育の担い手は女性、母、であると信じて、彼女たちへその協力を呼びかける切なる彼の親書であると考えられます。(中略)

この、「母の歌と愛撫の歌」は、母が子を守る——目守るときのうた、子どもを見守る母のおのずからなるひ

とりごと、見守りながらつい声に出してしまふ切ない母の愛情のかたかりかけ、つまり、母がうたう子守りうた、ともいえましよう。無論子守りうたといつてもいわゆる「おねんね」のうたとは限りませんし、「おきて泣く子のつらにくさ」とうたう母ならぬ辛い思いの職業人の子守りうたと考えられてはなりません。

フレーベルはこのようなくありふれた、本能的な母と子の日常のやりとり、母のうたと母と子の遊びの中に、人間の生命と知恵の扉を開く合鍵を見出し、ここに彼の教育基本のかたちを発見したのです。

母の本能、母なるが故に自然に具えられている能力、或る時は医師よりも敏感に子の病気を発見し、ある時は巧みに悪より遠ざけ、あるときは見事に危険より子どもを守り通す直感、本能、子に対する本能的な母の心の応答の中に、フレーベルは、全知・全能・至愛の創造者神が、その創造計画の中に女性を「ふさわしき助け手」、生命を生み、生命を育てるわざのよき助手と定められたことを信じました。

††

津義は、「母の書」のはしがきをこのようにはじめて
いる。
|| つづく ||

(西南女学院)

〔筆者紹介〕 一九二一年生れ。福岡の西南学院大学卒。現在、母校の兄弟校九州小倉の西南女学院短期大学教授。母の生涯を連載している本文には、祖母の徳永規矩・うた、及び父親の福永盾雄、母親の福永(旧姓徳永)津義という、筆者の家系的背景が詳しい。

幼年時代の父の追憶を物語化した佳品『星空』を『子ども
の館』(福音館、33号と35号)に発表している。主な著書は
『子どものコトバと文学』(新読書社)、『言語文学教育と人格
形成』(新読書社)、『保育』(博文社)、『現代の人間と教育』
(新読書社)。

なお合唱指揮者福永陽一郎氏は、筆者の実弟にあたる。

日本における最初の私立幼稚園とその背景 (5)

——桜井ちかと桜井女学校附属幼稚園——

小林 恵子

今回は、最終回として日本で最初の私立幼稚園を創立した桜井ちかと桜井女学校附属幼稚園のことを中心に書いてみたい。

一、創立者、桜井ちか（知嘉）

この学校の創立者、桜井ちか（安政二―昭和三年）は江戸日本橋に生れた。安政二年というときペリー提督が黒船を率い浦賀沖にあらわれて二年後で日本は鎖国の眠りから目覚めさせられたときである。ちかの父、平野与十郎は徳川歴代將軍の靈廟に神器を納める御用商人であっ

た。このため裕福だった家運は徳川幕府の崩壊と共に傾き、開国、攘夷と騒ぐ幕末の動乱の中で彼女は少女期を迎えた。

やがて明治五年、十八才で海軍士官、開拓史の船安藤丸の船員であった桜井昭恵と結婚した。昭恵は愛媛県大洲町若宮の神官の長男であったが、同九年、米国宣教師タムソンから洗礼を受けキリスト教徒となり、海軍を辞し同十二年には日本基督教会の牧師として伝道に従事した。これは結婚後、さきにキリスト教徒になっていた妻のちかの影響が大きかったと思われる。



桜井 ちか

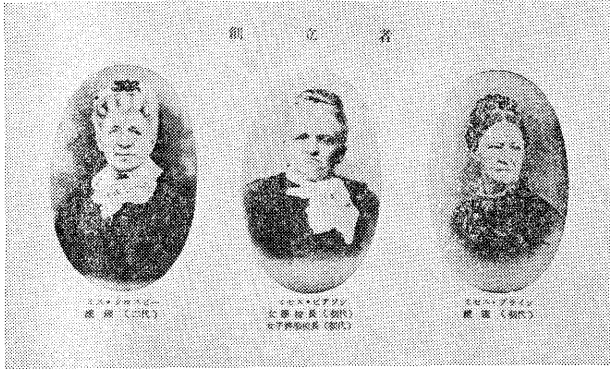
ちかの勉学は結婚後で夫の昭恵が船員で留守が続いたため、向学心の強い彼女は英語を学ぶため同五年、斉藤つね子が経営する神田の芳英女塾に入塾した。こゝは日本人経営の女塾として一番古いものと云われ、教師のなかには野球の最初の指導者として知られるホーレス・ウィルソンの妻がいた。^{註(2)} 当時の授業法は教師が生徒を教えるだけでなく上級生が下級生を教えるやり方で、ちかは半年ほど学んですぐ下の組を教えており学んだ知識を無駄にせず他人へ奉仕することが当然のことと習慣づけら

れ、この経験は、ちかが女学校を設立するときに変役立ったものと考えられる。

ちかが教会に通い始めたのは芳英女塾で英文を読んでいた時、文章の中に“*Our Father……*”とあり、二番目の字であるFが頭文字で始まっていることを不思議に思い教師に尋ねたところ築地の宣教師に聞くように云われカロルズ夫妻の教会に行ったことに始まる。そこで

Father は天の父である神のことを指すと教えられ、これをきっかけに新栄教会に出席し明治七年、宣教師タムソンから洗礼を受けた。^{註(3)} その後、横浜二二番の共立女学校に入学し英語と割烹の勉強につとめたがこの学校は横浜のミッションホーム（亜米利加婦人教授所）が女子教育機関として発展したものである。前回述べたので割愛するが、この学校の設立者である三人の婦人宣教師、プライン、ピアノン、クロスビーに接し学んだ人々から桜井ちかや二宮わかのように女子教育や幼稚園及び児童福祉の礎を築いた人材が育っている。ちかがキリスト教になったのも当時の宣教師たちの人格的感化と聖書の教

著 立 者



えによるものでとりわけ当時のような男尊女卑の封建的
社会にあつては、女子が男子と等しく一個の尊い人格で
あるという考えは、彼女の心を強くとらえたのである。
それは女大学にみるような儒教的立場にたつ女性観では

なく、女性が女性
としての才能を十
分に発揮し社会の
一員として女性の
役割を果すことで
あつた。とくに女
子は将来、母とし
て子どもを育てる
任務があり男子と
同様に学問が必要
で、女に学問は有
害と考えるのは大
変なまちがいで女
子教育こそ当時の

日本で最も必要なことと考へたのである。こうした女子
教育への着手はキリスト教プロテスタント宣教師の手に
よつて創設されたミッションスクールが先駆的役割を果
しており、横浜のフェリス女学院を最初として先に述べ
た横浜共立女学校（現・共立学園）などがその先駆であ
る。当時、こうした事業に當つていたプロテスタント系
の指導者たちはキリスト教を基盤として人格の尊嚴の意
識と自由平等の理念にたち欧化思想をもつて近代日本を
再建しようとする開拓精神にもえていたのである。そし
て、これらプロテスタント系の宣教師のもとに集つた青
年たちの多くは儒教的教養を身につけた反明治政府の武
士階級の旧幕の出身で彼等が日本の近代化に指導的役割
を果した。桜井ちかもその一人で、いわばその時代にあ
つて個にめざめた新しい女性であつたと云えよう。

桜井女学校の開業願書に、ちかの履歴書が次のように
記されている。^{註(4)}

愛媛県平民桜井昭恵妻

桜井 知 嘉

安政二年乙卯歲四月四日生ル

明治五年四月ヨリ同六年十月迄府下神田柄木町芳英社江入塾
シ女教師米国人ウエルソン氏及ヒ齋藤常女ニ従ヒ第一第二リ
ートル文法書地理書万国史等ヲ習読ス

同六年十一月ヨリ同七年十月迄慶応義塾卒業生大窪実ト申者
ヲ雇ヒ各国史窮理書經濟書修身書等ヲ学習ス

同七年十一月ヨリ米国女教師タムソン氏ニ従ヒ亦地理書窮理
書修身書生理書ヲ読ミ旁ラ作文数学等ヲ本年九月迄学習ス

この履歴に共立女学校に学んだ事が記されていないのは何故であろうか。横浜共立学園同窓会名簿に卒業制度施行前修了生としてちかの名前が明記されている。個人教授を受けてまで学習を続けたのは私塾を開設し女子教育を始めようと考へてのことであつた。ちかが如何に主体的な行動力と旺盛な向学心を常に持ち続けたかは、後に三度にわたり渡米し女子教育を視察、同二八年、東京本郷に桜井女塾を開設し科学的な家政を重視し、料理に関する書を次々と著わしたことからあきらかである。^(註5)

二、桜井女学校、小学校、貧学校の設立

明治九年十月二十日、ちかは家塾開業願を提出し東京麹町中六番町一に八畳二間と玄関と女中室付の家を家賃五円で借り、少数の女生徒で女子教育を始めた。最初の校名を桜井女校といつたが、この家塾は日本女性がミッシヨンの手をかりず独力で始めたキリスト教主義女学校として注目すべきものであつた。学校といつても今日の学校のようにではなく少人数で寝起きを共にして生活ぐるみの教育であつた。やがて、その家手が手狭なため東郷坂上にあつた旧旗本屋敷に移転し、明治十二年十月^(註6)には女学校内に高等小学科を設置した。こゝには六歳からの男女児を受け入れたが女学校であるため男子は十歳までと限定した。届けに生徒三五名(男子四名を含む)教員二人と記されている。^(註7)六歳でこの学校に入ったガントレット恒(旧姓・山田恒。作曲家、山田耕筰の姉)は当時の思い出を次のように記している。「叔父は私をこの桜井女学校に入れることにした。私はまだ頑是ない六歳の身

で母のもとを離れ、学校の寄宿舎に入るので先ず蒲団の上げおろしの練習をしたものだそうである。さて叔父は私を家から引離したものの不安でたまらず、毎日牛込から番町まで通って様子を見届けて帰った。幸いにも桜井校長が生徒をよく愛され、殊に子のない先生は最年少者の私を愛して私が家に帰りがると肌っ子おんぶ（肌がちかに背負ふ）をして下さったものである。「構内には教室と寄宿舎のほかに校長の住宅があつて、おやつの間になると、ちか子先生の御主人が縁側に立って、みなこい、みなこいと節をつけて呼んだものである。すると子供達は馳出していつて塩煎餅や豆などを頂いてくるのである。ときには氷砂糖のこともあつた。」

「桜井先生は小柄な綺麗な方で大きな丸髷に浅葱の手絡、赤い珊瑚の簪が子供心に美しく、その上、先生は叱るということをなさらなかつた」^{註(8)}

こうした思い出の記から桜井女学校の当時の生活ぐらゐの家族的な学校風景が想像される。卒業生たちの回想文集などをみると創立者の桜井ちかは、情に厚く世話好

きで困っている人たちを見捨てて置くことの出来ない性格の女性であつた。^{註(9)} 注目すべきことは明治十一年に牛込弘方町二三番地に貧学校を設置したことである。こうした博愛主義的な事業は横浜のミッシヨンホームで三人の婦人宣教師が混血児の養育をしたようにすべての人間が一個の人格として尊重されるべきであるというキリスト教を基盤とした人道主義的な考えからでている。校則に「一、夫レ此ノ校ハ年齢ヲ問ハズ月謝ヲ受ケズ文具書物ヲ貸与シ専ラ貧人ノ子女ニシテ道路ニ遊ビ戯レ学ニ就カザル者ニ小学校ニ入ルノ手続ヲ教ユル者ナレバ最モ簡易ヲ主トシ文字ハ貴賤上下共必要ノ旨意ヲ示論スルノミ」とあり、午前は桜井女学校の助教が教師となり午後一時から三時までは桜井ちか自身が教鞭をとつた。この学校の世話人として十一名があげられているが財政難のため惜しくも二年後の明治十三年四月六日をもって廃止となつてゐる。^{註(10)}

三、桜井女学校附属幼稚園の設置

貧学校の廃止された十三年四月、ちかは桜井女学校に
 附属幼稚園を設置した。これは東京で最初の私立幼稚園
 で、キリスト教主義幼稚園の最初である。また、この園
 が日本で最初の私立幼稚園であった。すでに前年、高等
 小学科を附設し次いで幼稚園を設立したのは幼児期から
 の人間教育を考へてのことであつたが、それとともに女
 子教育との関連から女学校を母体として幼稚園を発足し
 育児を学ばせることにあつた。桜井女学校の校則に「人
 ノ父母タルモノ子ヲ教育成長セシムルハ即祖先ノ負債ナ
 リ故ニ母タルモノ家庭教育ノ法ニ熟シ前債ヲ償フ事ノ道
 ナカル可ラス……」^{註(1)}とあり、教則のなかに育児の教科目
 をとりあげている。また毎木曜の午後には生徒以外の婦
 女子の傍聴を許し、科学的な家政教育を重視していたこ
 となど、^{註(2)}ユニークな女子教育を行ったと考えられる。附
 属幼稚園の規則及び保育科目は次の通りである。^{註(3)}

桜井女学校附属幼稚園規則

一 幼稚園開設ノ旨主ハ学齡未滿ノ幼稚ヲシテ天賦ノ知覺ヲ開
 達シ固有ノ心思ヲ啓発シ身体ノ健全ヲ滋補シ交際ノ情誼ヲ

曉知シ善良ノ言行ヲ慣熟セシムルニ在リ
 一 幼稚ハ男女ヲ論セス年齡滿三年以上六年以下トス
 但時宜ニ由リ滿二年以上ノ者モ入園セシムルコトアリ
 一 幼稚ノ未タ種痘ヲナス或ハ天然痘ヲ歴サル者及ヒ伝染ス
 へキ惡疾ニ罹ルト認ルトキハ入園ヲ許サス且ツ既ニ入園スル
 者ト雖トモ伝染病ニ罹ルトキハ快癒ニ至ル迄來園スルヲ得
 ス
 一 幼稚保育ノ時間ハ毎日四時トス
 一 休日ハ日曜日大祭日、夏期七月廿日ヨリ八月廿日迄冬期十
 二月廿五日ヨリ一月七日迄トス
 一 入園ノ日ニ在園年間ノ玩器料ヲシテ金參円ヲ收ムヘシ
 一 毎月保育料トシテ金壹円ヲ五日迄ニ收ムヘシ
 一 入園セント欲スル者ハ左ノ書式ノ保証状ヲ出スヘシ

保育科目

第一 物品科

日用ノ器物即チ椅子机或ハ禽獸花果等ニ就キ其性質或ハ形
 状等ヲ示ス

第二 美麗科

美麗トシテ好愛スル物即チ彩色等ヲ示ス

第三 知識科

観玩ニ由テ知識ヲ開ク則チ立方体ハ幾個ノ端線平面幾個ノ
 角ヨリ成リ其形ハ如何ナル等ヲ示ス

五十音 計數 唱歌

單語圖 說話 体操

書式

用紙美濃紙

何使府族籍某子女
姓名

出生年月

右御校附属幼稚園へ入園相願候付テハ都テ御規則ノ通為相守
可申依テ保証状差出候也

父母或へ証人

年月日

姓名印

桜井女学校

御中

この規則をみると東京女子師範学校附属幼稚園のものとほぼ同じで、これにならったことが理解される。たゞ保育料が女子師範の方は一ヶ月金二十五銭に対し一円、入園料（玩器料）として金三円とあり、かなり高額であったことがわかる。国公立と私立の違いである。玩器料とは、フレーベルの恩物を各自に買い与えたのである。最初の保育者は東京女子師範小学科を十三年二月に卒業した箕輪^{みわづる}で入園当初は七名で保育が開始された。箕輪の教師履歴や園児数などについては、すでに同雑誌の四月号で「和歌山県の稚児保育所と桜井女学校附属幼

稚園」と題して発表したので割愛したい。とにかく最初の保育は東京女子師範学校附属幼稚園と同じにフレーベルの恩物を使用し、雅楽による保育唱歌で家鳩の遊戯などがなされたのであった。そして、その年の報告では園児数十名と増えている。

四、ツルー夫人と桜井女学校

桜井ちかが夫の伝道の地、北海道に赴任したのは翌十四年の夏のことである。ちかは女子教育家としても事業家としても極めてすぐれた才覚の持主であったが学校の規模が大きくなるにつれ財政的にも苦しく手に余るものがあり、ちかの北海道への赴任に際し学校は個人の手から米国長老教会のミッションの配下に移されることになった。そして矢島^{やしま}楯が桜井ちかに代り校長となったが実際にはツルー夫人が経営のすべてを担当し、早くも中六番町二十八番地に四千円の大金を投じ立派な校舎が建築されることになった。朝野新聞（明治十四年七月九日）に「桜井女学校新築落成して開業式」と題し次のように

記されている。「六番町の桜井女学校は生徒の数も日に増加するを以て、今度西洋風の一大校舎を設立し全く落成と為りしを以て一昨日其の開校式を行はれ、東京府知事も其の席に臨み、加藤弘之、フルベッキ両氏の演説あり、校主桜井昭恵君夫妻は耶蘇教会中の人なるを以て、来賓には数十の西洋人あり、許多の紳士と貴女、少娘の盛服蔽粧して楼上楼下に充滿せしは実に目覚しき事なり、校主夫妻は不日北海道へ赴き、同地へも女学校を建てる見込みなりと聞けり」^{(註(4))}。こうしてミッシェンの手に移った学校はツルー夫人の手によって新しい発展をとげることになるのである。

こゝでツルー夫人のことに少しふれてみたい。ツルー夫人 (True, Mrs. Maria T. Pitcher 1840-1896) はニューヨーク州ピニシーの農家に生れ幼くして母を失い、村の学校を卒業したあと小学校の教師を勤めた。のち州内の牧師、アルバート・ツルーと結婚したが夫が外国伝道を志しながら果せず若くして亡くなったので夫の志を継ぐためニューヨークの女子神学校に学んだ。^{(註(5))} のち米国婦

人一致外国伝道協会 (The Woman's Union Missionary Society) の婦人宣教師として中国北京に赴き女学校の教師を勤めた。米国婦人一致外国伝道協会は前回で述べたがドリーマス夫人によってニューヨークに設立された超教派によるミッシェンボードである。先に述べた横浜の共立女学校の創立者であるブライン、クロスビー、ピアソンの三人の婦人宣教師を派遣したのもこの組織団体であった。明治七年、夫人は横浜に来てのち二十二番の共立女学校で伝道と教育に当たったが、この学校の生徒の一人であったのが桜井ちかである。のちに桜井女学校をツルーの手にゆだねたのも、こうした母校での出会いがあったることであつたと思われる。その後、同十年からは長老教会派に属し、東京や金沢で学校や教会で女子教育と宣教に従事した。特に注目されることは、同十二年にウイン夫妻と共に金沢に赴き教会の創立に尽していることである。交通が不便で仏教の盛んな金沢での伝道は大変なことであつたと思われる。夫人はこゝで英語を教えウイン夫妻を助けたが、こうした基盤によって北陸学院

が金沢では最初の女学校として同十七年に創立されている。興味深いことは同十九年にこの学院に附属幼稚園（当時は英和幼稚園と名称）が設立されたことである。創立者、ミス・ポートルはツルリーの助言や指導を受け保母の吉田えつを一ヶ年、桜井女学校幼稚師範科に学ばせている。この幼稚園はキリスト教主義幼稚園としては桜井女学校、ブリテン女学校附属幼稚園に次いで誕生し継続年数から云えば最も長く、現在に続く最古の幼稚園である。桜井女学校とは同じ長老教会に属していたこともあって両者は密接なつながりのあったことが理解される。

五、桜井女学校附属幼稚園と幼稚保育科

ツルリーは創立当初からの幼稚園の教授法に満足できなかったようで明治十六年、幼稚園を拡張するため三番町五二番に分校を開き米国に帰国し、この道の専門家、ミス・ミリケン (Elizabeth P. Milliken, 1860-1951) を伴って翌十七年に戻り幼稚園の改善に当らせた。ミリケンのことはこれまで明らかでなかったが米国からの報告で

はフロリダ州の生れで、フィラデルフィアの公立学校及びバーミングハムの学校に学び *Aidin*。更に教員養成所で幼稚園の資格をとったことがこのほど明らかになった。^{註^m} こうして同年、九月にはミリケンの指導で桜井女学校幼稚保育科（一ヶ年制）が開設された。私立の保育養成所として最初のものである。榎坂幼稚園の保母となつた湯浅はつ（一回卒）や先に述べた金沢の英和幼稚園の保母、吉田えつ（二回卒）などがこゝに学んだ。これまでの保育とどのように違ったかを卒業生の回想からたどってみよう。ガントレット恒は「七十七年の思い出^{註ⁿ}」として、「ミス・ミリケンが来朝して新しく園長となるまでは師範学校の幼稚園の先生が来て教えたことも憶えている。フレール式の恩物を用いた。また唱歌が頗るぶるっていた。

うた舞に、立ちつどひたる、たはむれの、めしひの君よ、友どちよ、歌ふまに　／＼　そが中の、一人の君を、耳とくも、それときゝ知り、心あての、その名たがへず、さゝば指さなん

それから餅搗の歌

洗ひ米、ひいて粉にしつ、湯にかけて、つきにつきぬく、だんごの粉、ペタン、ペタン

楽器がなくて笏で拍子をとってシナの節で歌うのであるが、今日のことを考えるとまるで異国のやうな感じがする。」とある。

盲になった鬼が声だけをたよりに友だちをあてる遊びの歌と思われるが当時の保育がフレーベルの恩物や母の遊戯を用いながら歌詩や楽器はこれにそぐわない日本古

来の古めかしいものであったことが理解される。その後、明治十二、三年にこの幼稚園でミス・ミリケンから

学んだ一柳満喜子は当時の思い出を—もう十数年前のことになるが—私に話して聞かせて下さった。^{註(9)}一柳は近

江兄弟社の創立者、ヴォーリスと結婚した女性である。

私がお会したのは近江兄弟社の一室で未亡人となられた晩年である。ツルー夫人やミス・ミリケンが大変やさしい方であったのに最初は外人が非常に恐かったといふ女中と一緒に来て女中が帰ると泣いていたところ、外人

の先生が抱いて下さった。始めはどこか恐しい所に入られるのではないかと思つた。でもそのうち外人のやさしさが感じられ決して恐しい人ではないことに気づき愛情と尊敬の気持を持つようになった。自分の家が火事になったとき洋服を作つて下さった事も忘れられないという。当時の園生活でなつかしく残っているのは、クリスマスに「靴の中の小人」という劇をしたこと、みんなでベンチに坐り、テーブルにお弁当を置いてお祈りをしたこと、歌といえば米國での幼稚園の歌をならつた。

Thumbs and fingers says good morning の指あさびや
Oh mother! How pretty the moon looks tonight!

お月様などの歌でこれらはフレーベルの「母の歌と愛撫の歌」によるものと思われる。米國の幼稚園で歌つたものをミス・ミリケンが教えたようであるが英語のまま記憶に残っているところを見ると幼児期の教育の大切さが痛切に感じられる。フレーベルの恩物の積木で遊んだことや手技で折紙をした事などの思い出は明治期の幼稚園に共通してみられることであるが、遊びや生活を通して

人間の教育を第一に考えていたことは注目すべきことであつた。そこではフレールベルの意図した母の教育―広く女子教育と幼児の教育が大切に考えられ、人間形成が生活や遊びのなかでとらえられていた。すなわち、草創期のキリスト教幼稚園はフレールベルの精神を形式的でなく生活の中で実践していたのである。残念なことに桜井女学校附属幼稚園は明治二十九年の学事年報を最後として姿を消しており、^{註(5)}幼稚園保育科も同じ頃、廃止されたようである。桜井女学校は新栄女学校と合併し女子学院として現存に至っており、こゝで数多くの女子教育事業がなされた。看護婦養成所もその一つで、また婦人矯風会を設立し久布白落実など婦人社会運動家を育てたのもこの学校であつた。そして、現存する最古のキリスト教幼稚園といわれる北陸学院附属第一幼稚園もこの園を基盤として誕生したといえるであろう。

(国立音楽大学)

- 註(1)「東京の女子教育」(都史紀要九) 東京都 昭和36・11 31頁
 (2)同右書 32頁
 (3)桜井ちか子先生談「英語を学んだ時の苦心」『女子学院五十年史』女子学院 昭和三年 回想録

(4)桜井女学校開業願書 明治九年十月―十二月私学開業願 東京都公文館

(5)桜井淳司編「桜井ちか小伝」昭和五十一

(6)高等小学科の学科増科願は九月十九日であるが認可は十月三日となつてゐる。

明治十二年十月―十二月私立学校書類

(7)同右書類 東京公文書館

(8)前掲書「桜井ちか小伝」 五一―六頁

(9)同右書

(10)閉校御届 明治十三年四月―六月私立学校書類

(11)「往復書類」学務課 明治十三年一月―十二月 東京都公文書館

(12)前掲書「東京の女子教育」五―三頁

(13)明治十三年四月―六月私立学校書類 東京都公文書館

(14)新聞集成明治編年史 第四卷 明治十二―十四 朝野新聞 明治十四年七月九日

(15)田村直臣著「ツル―夫人之傳」故ツル―夫人記念館設立所 明治三二年

(16)「北陸学院八十年史」北陸学院 昭和四一年 一頁

(17)米国 Presbyterian Historical Society 425 Lombard Street Philadelphia の調査報告による

(18)Pantelott 恒「七十七年の思ひ出」『女子学院八十年史』女子学院発行 昭和二六年

(19)小林恵子「日本の保育史に及ぼしたプロテスタント婦人宣教師の貢獻」教育と福祉 アジア福祉研究所 昭和五十年 二〇頁、四九頁

「日本キリスト教保育八十年史」基督教保育連盟 昭和四一年 一―六頁

(20)明治二十九年東京府管内学事年報丙号表「幼稚園、雑件に関する書類」第三課文書学務 東京都公文書館

☆お世話になった方(敬称略)

東京都公文書館 東京神学大学図書館 国立音楽大学図書館 梶嶋

教会牧師森下憲郷 女子学院図書館

☆写真掲載「幼児保育百年の歩み」日本保育学会編 ぎょうせい 昭和五十六

近代短歌に現われた子ども(三)



大塚
雅彦

(6) 新井 洸あき

佐佐木信綱の竹柏園からはすぐれた歌人が輩出したが、その中で、比較的世に知られること少なかったけれども、珠玉のような作品をのこした歌人を取りあげよう。新井洸である。彼は明治一六年

(一八八三) 東京の日本橋に生まれた。

本名幸太郎。府立一中を卒え、信綱門に入った。洋画家になろうとして藤島武二の門に入り、美術学校の試験に合格したが、家事の都合で退学。また、小説に志し尾崎紅葉の門に入ったが間もなく紅葉の死にあい、いずれも志を果たさなかった。のち、同じ信綱門の石樽千亦いしくちちまたのひきにより帝国水難救済会に就職し長く勤めた。大正一四年(一九二五)没。四十三

歳であった。「心の花」の編集にたずさわったが、彼の歌風は都会人らしい近代風の清新さに溢れている。歌集

『微明』（大正5）、『新井洗歌集』（昭和6）がある。彼

が同門の石樽千亦・川田順・木下利玄・九条武子・柳原白蓮・片山広子等の如く世に知られること少なかったのは、貧しいサラリーマンとして一生を早く終ったこと、

性格が陰性で頑固で、内気であり、芸術家気質で、あまり広い社会に出ることを好まなかったらしいこと、作品集の流布範囲が狭かったため広く知られなかったこと等によるものであろう。しかし『新井洗歌集』の序文で川田順が「彼の芸術は名工の彫琢である。しづかさである。渋味である。燻し銀の匂いである」と述べているのは、知己の言といえようか。この人の相聞歌はすばらしく、私はそれを長く愛誦している。「人間のいのちの奥のはづかしさ滲み来るかもよ君に對へば」「おのが身を小さくきたなく價なくおもひ詰むらく戀は退かず」——このようなプラトニック・ラブ的な、絶妙な恋のしらべを、今までの誰が詠じたらうか……。こうした端正な相

聞歌をつくり、若くして逝いた歌人はまた、次のような子どもをうたった佳作をのこした。

①そむかれむ日の悲びをうれひつつ百日に足らぬ子を
いだくなり

②人の子のまして女と生れしをくやむ日あるなめぐし
きものを

①は『微明』所収。この「子」というのは大正五年三月に生まれた長男光であろう。父の洗は時に三十四才である。子どもは成長すれば、いずれは親の自由にならない親にそむく子、親を離れてゆく子、あるいは親に先立つ子、——それでいて、いやそれだからこそ離れられない親子の縁、まことに親子の絆というものは宿命的なものだ。『きけわたつみのこえ』の中で、或る戦死した学生は次のように書いている——「総ては悲劇でした。しかし芥川も言っているようにへ親子となった時に既に人生の悲劇が始まったのだ」ということは、いみじくも本当だと思います。気の毒なお父さんお母さんに恵みあれかし。やがては訪れるであろう親子背反や親子離別の宿

命——それを思いながら、生まれて未だ百日もたたない赤ん坊を抱いている若い父親の心境、それをみごとに描いている洗のこの歌は、人間のかなしみの根源をうたっているのではないか。

②は「微明以後」の作品で『新井洗歌集』にある。この歌に詠まれている赤児は大正十三年に生まれた長女の子であろう。洗の逝去の前年で、彼は四十二才であったが、既に身体の違和は萌していたようである。それだけに、ひとしお生れた赤児の将来に対する思いが深かったであろう。拙訳してみよう——「人身逢うこと難し、と仏教でもいつているが、たまたま、その、人の子としての尊いいのちをもって、お前はこの世に生まれてきた。まして、人々から愛される女の子として生まれたのだ。わが子よ、その貴重な女としての生涯を将来後悔するよいうなことがあってくれるな。幸せな日を送ってほしい。こうして抱きしめていると、生ツバなまが湧くほど、いとしくていとしくてたまらないものを」。これまた、心にしみ通るような作で、私はこの歌を誦していると、涙のにじ

む思いがする。

③今は暮れてひたすら暗き河口におもかじ梶と呼べり少年のこゑ

④うなじ白きこの幼きが裾からげお百度踏めり母と祖はは母と

共に歌集『微明』所収。①は「夕潮」という小題のある八首中の一首で、この一連の前に「六月十三日永代橋畔即事」という小題のある歌も並んでいるから、大川（隅田川）辺の夕ぐれの一場面だろう。船に乗って勤勞をしている少年（水上生活者の子どもか？）の「面舵！」と叫んだ鋭いかげ声がきこえてくるような、活き活きした場面である。④は、首筋の白い幼な児（女兒だろう）が、裾をからげて母や祖母と共にお百度を踏んでいる状態で、属目の歌である。「お百度参り」という行事は今はずたれてしまったが、願ひ事が叶うように神社や寺に参り、時には素足で一定の距離を百回往復しておがむもので、女性が愛する人の病氣平癒祈願や、出征した夫や子の無事祈願のためによく行なった古い習俗である。や

はり信綱門の大塚楠緒子（明治八・四三）お茶の水高女の前身たる東京女子師範付属女学校卒、東大・美学教授の大塚保治博士の妻だったが、早世した）の作った「お百度詣」^{ももて}、「太陽」明治38・1）は、与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」と共に、一種の厭戦詩として知られる。愛する者のためにこのようなせつばつまった神仏祈願のかたちを通じてしか行動できなかった昔の女性の悲しみは、重い女性の歴史を語るが、④の歌は、そこに幼児をも点綴して、一層その効果を高めている。

(7) 木下利玄

もう一人、竹柏園の歌人の作を見よう。木下利玄（本名としはる）である。明治一九年岡山県の足守町に生まれた。先祖は和歌で知られた木下長嘯子である。七才のとき、伯父の子爵木下利恭の養嗣子となった。木下家は旧足守藩主である。学習院を経て、東大国文科卒。学習院時代から志賀直哉・武者小路実篤らと交わり「白樺」

創刊の一員となったことで知られる。歌人としては「花」に属すると共に、晩年には大正一三年創刊の超結社誌「日光」にも同人として迎えられた。大正一四年没。歌集に『銀』『紅玉』『一路』、歌文集『李青集』、『木下利玄全集』上・下等がある。その歌風は「白樺」のヒューマニズム的な匂いや、浪漫性を湛えながら人間くさく、また、その歌調は字余り、口語や俗語の大胆な使用、四四調というユニークな韻律等で、新生面を開いている。

①あすなるの高き梢^{こずえ}を風わたるわれは涙の目をしばたたく

②子を失ふ親の悲しみそは遠きことと思ひしを今日われに来し

『銀』所収。「利公の爲めに」という題のある一連中の作。利玄の長男利公は明治四五年八月生まれて生後五日目に死んだ。幼な子を失った歎きをうたう作には、先に述べた伊藤左千夫を始め、後述予定の窪田空穂・石川啄木・島木赤彦・古泉千樞等、いずれもすぐれた悲痛な歌

をのこしているが、まことに短歌の料は相聞と挽歌にき
わまることを証するものであろうか。①の歌の中の「あ
すなる」は翌松あるいは羅漢柏と書き、「あすなろう」
「ひば」「あすわ」等の俗称もある、ひのき科の常緑喬木
である。「明日はヒノキになろう」の意がこめられてい
る（井上靖に「あすなる物語」の作がある）。葉が松に似
てもっと大きく、鱗状に重なり合う。庭のあすなるの高
い梢を吹き鳴らして風が過ぎてゆく、それを、生まれて
間もない子を死なした作者が、悲しみの涙に溢れた目を
しきりにまたたきながら茫然と見つめているのである。

本林勝夫教授は「あすなる」という名まえが、成長の日も
みずに逝った子への感傷をいっそうかきたてているのか
も知れない」（前出『現代短歌』）と述べ、日笠祐二氏は
「涙の目をしばたたく」の表現について、「やや概念的な
用語であるが、しかもその口語の発想を卑俗低調に墮おとさ
しめないだけの、高雅・切実に張りつめた声調を有して
いることを、見のがしてはならない」（吉田精一他二氏
編『現代短歌評釈』昭41・2）と述べている。ちなみに

利玄は子ども連が悪く、大正三年三月に生まれた次男二
郎も翌四年一二月に死亡（この悲しみをうたった作品に
『紅玉』所収の「二郎に」という一連がある）、更に、大
正六年六月出生の長女夏子も同年一二月死去（これにつ
いても同じく『紅玉』所収の「夏子に」の一連がある）
している。この三人の子の死は、利玄を深くうちめし
たようである。②は、今まで他人事と思っていた子ども
の死という悲劇が今日自分にやって来た、という実感の
訴えは、読者の共感をさそう。

③ 街をゆき子供こどもの傍そばを通る時蜜柑みかんの香かせり冬ふゆがまた来
る

④ 子供こどもゆゑ褒美ほびなくてはと不憫あはれがり妻つまが見てゐる遠お

よぎの列

⑤ 遠足うんそくの小学生徒どうぎょうせい有頂天うっちゃんに大手おほてふりふり往来わらいとほる

⑥ 着き脹はれて歩あかされぬし女の児こはたと倒たふれその儘まま泣な

くも

利玄はまた、他人の子どもをしきりにうたっている。

利玄全歌集を読んでいると、子どもを素材にしたものが

すこぶる多いのに気付くのである。③から⑤までは『紅玉』所収、⑥は『一路』所収である。③はいかにも新鮮な歌だ。街頭でふとすれ違った子供から蜜柑の香をかぎとり、それに季節の推移を感じとっているのであり、利

玄自ら「自分の歌の出来た境地」という文章（『新家庭』大正11・10月号）の中で「あの青蜜柑の香の鋭く香り高

く酸っぱく、新鮮な事はどうだ。此青蜜柑に向って先づ突進するものは、街に遊ぶ子供である」と述べているのが参考になる。この歌の次に「子供みてみかんの香せり駄菓子屋の午後日のあたらぬ店の寒けさ」という一首もある。④は「小学校生徒遠遊」という小題のある連作中の歌。「あんなに一生涯命泳いでいて、疲れるでしょうに。かわいそうに。あの子ども達にごほうびあげたいわね」とでも眩きながら見ている照子夫人と利玄。子ども達への愛情の深かった夫妻の姿。⑤はまた、遠足の小学生達の姿態を実にたくみにとらえている。「有頂天」などという俗語や、「大手ふりふり」という口語調などが不思議な効果を出して、まさしく余人の真似られぬ

利玄調である。⑥も「ばたんと倒れ」と擬音を入れた平易な童謡調が、子どもの姿を実によく出して、泣きじゃくっている恰好が眼に浮ぶ。利玄短歌のつくり出した真情流露の子ども世界であらう。

(8) 若山牧水

若山牧水は本名繁、明治一八年（一八八五）に宮崎県東臼杵郡東郷村坪谷に生まれた。上京して尾上柴舟の門に入り、早大英文科卒。大学卒業の年に歌集『海の声』（明治41）を出版。これと第二歌集『独り歌へる』に、更に新作を加えた『別離』（明治43）によって、歌人としての声価を確立した。歌誌「創作」を発行し、生涯それを続けた。自然主義歌人といわれるが、その浪漫的な青春詠は今もなお人々の琴線を揺り、今日でも最も愛される歌人の一人である。酒と旅を愛して昭和三年（一九二八）その生を終えた。享年四四才。歌集はすこぶる多く一五冊に達する。歌論歌話、隨筆、紀行文も多い。全集

は改造社版と雄鶏社版とがある。その伝記的研究等も近年は著しく進んでいる（桜楓社刊『若山牧水』（藤岡武雄著）挿入の月報「短歌研究」12所載の拙稿「若山牧水研究の展望」参照）。

① 著換すと吾子を裸体に朝床に立たせてしばし無で讀ふるも

② 児等病めば昼はえ喰はず小夜更けてひそかには喰ふ

この梨の実を

③ 六歳の兄四歳の妹のならば寝てかたりあふ聞けば癒えて後のこと

④ 学校にも読める声のなつかしき身にしみとほる山里すぎて

⑤ 人過ぐと生徒等はみな走せ寄りて垣よりぞ見る学校の庭の

①は歌集『朝の歌』所収。大正四年作。この「吾子」

は大正二年に生まれた長男旅人であろう。「この頃妻は長女みさきの出産が近かったか、あるいは妻が病気で寝ていた時のことかもしれない。牧水が長男旅人の面倒を

みている歌である」と藤岡武雄日大教授は述べている（藤岡著『若山牧水』昭56・3）。満二才の子どもの寝巻を着がえさせようとして、裸にして朝床に立たせたところ、すっかり大きくなっているので、撫でてほめている微笑ましい光景である。この頃「昼深み庭は光りつ吾子ひとり真裸体にして鶏追ひ遊ぶ」などの歌も作っている。

②③は歌集『くろ土』所収。大正七年作。「児等の病めるに」と題し、「八月初め兄の旅人先づ病み、妹みさき子相次で倒れ、九月半ばを過ぐれども癒えず、兩人とも腸をいたためたるなり」の詞書がある。病気は二人とも腸チフスだった。だから②の歌の如く、子ども達は食べられないので、親は知られないように遠慮して（？）こっそりと、夜更けに梨を食べているわけで、ほろにが味わいとベーススをもつ歌だ。「こほろぎのしとどに鳴ける真夜中に喰ふ梨の実のつゆは垂りつつ」という作が続いている。③は病臥して並んで寝ている幼い兄妹が、病気がなおったあとの話をし合っているいじらしい景

を描いている。いざいまでは飯ぞといへば起き出でてゐな
らび勇む泣くべかりけり」といふ歌も、一連の中にあ
る。親心をにじませ、子煩悩の牧水をしのばせる。③に
ついて谷馨元早大教授は「主観的な感情句を用いない
で、全句をあげて客観的に病児のあわれな様を歌ってい
るところがよい」（谷『現代短歌』昭26・12）と述べて
いる。

④⑤は歌集『山桜の歌』所収。牧水は大正十一年の十
月中旬、信州から上州に入り、草津・花敷・沢渡・四万
・法師・湯宿・老神・白根等の諸温泉をめぐり歩いたが
、その折通過した小雨村という山村の小学校を歌ったも
のである。「ありとしも思われぬ処に五戸十戸ほどの村
ありてそれぞれに学校を設け子供たちに物教えたり」の
詞書がある。フト通りかかった山奥の田舎の小学校から
郷愁のようなものを誘われたらしいことが④などからよ
くわかる。⑤などは、ものを珍らしがって、校庭から垣
根越しに通行人をのぞき見たりする村童たちの動作が、
みごとなまでに描出されている。なおこの一連には「先

生の一途なるさまも涙なれ家十ばかりなる村の学校に」
「先生のあたまの禿もたふとけれ此処に死なむと教ふる
ならむ」等の秀作があり、「此処に死なむと」などは、
牧水の深い感慨を吐露したような、たくみな表現だ。森
脇一夫博士は「作者の純真な性情を読みとることができ
る」と述べている（前掲、吉田精一他編『現代短歌評
釈』。私などは、自分の郷里上州の山村が素材になっ
るだけに、この一連は特に忘れがたく心にのこるのであ
る。（未完）

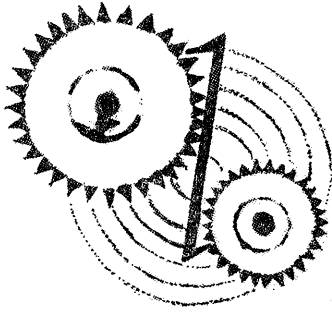
〔筆者紹介〕

大正十年群馬県生れ。東京家庭裁判所調査官として活躍さ
れた後、昭和五十五年より、本学児童学科教授として赴任さ
れ、青少年問題の講座を担当。『非行をみる』（三省堂）等の
著書の他、啄木、茂吉の短歌研究の論考もあり、『昭和万葉
集』に歌が収められる歌人でもある。

（お茶の水女子大学）

お母さま方は太陽だ

小林 つや江



「本稿はお茶の水女子大学附属幼稚園で行なわれた講演をもとに加筆修正されたものです。」

皆さん、おはようございます。昨晚は皆さんにお目にかかれるのがうれしくてようにねむれませんでした。〈笑い〉

皆様のお顔が目にかんできました。どんな顔かな、円い顔、四角な顔、三角形の顔、いろいろ形はちがっていても、心はみんなやさしいお母様方、みんなお子さまに情熱をもたれ、毎日毎日力を強く生きていらっしゃるお母様方だと思います。

わたくしもこの幼稚園に曾孫がお世話様になっておりますので、今日は母親の一人としてよろこんでお話に伺ったわけでありますからどうぞよろしく願います。

まず最初に申し上げたいことは「お母様は太陽だ」ということあります。もしこの世に太陽がなかったら世の中はどうなることでしょうか。ごましましょう。

昔々のお話ですが天照大神がおられて楽

楽しい生活をしていました。天照大神の弟神スサノオノミコトが悪いことばかりしていたので大神様は大変なおこりになり、天の岩戸へおかくれになったというお話しは皆様よくごぞんじのことと思います。その時世の中はどうなったでしょう。世の中はくらやみになり悪い神様がはびこってしまったました。皆々心配していた時、アメノウズメノミコトがおどりが上手でしたので酒だるの上でたのしい、おもしろいおどりを踊ったそうです。皆面白いといって手をたたいていました。天照大神様、何事であろうかと、そーっと天の岩戸をあけて、外を御らんになられようとした時、タヂカラオノミコトが、ぐっと天の岩戸をおひらきになったというお話です。何回きいても楽しいお話ですね。一寸余談になりましたがお母様のいらっしゃらないお家は丁度そのようだと思います。

- ・ 太陽は光を与えてくれます。
- ・ 太陽は熱を与えてくれます。そして
- ・ 太陽によって生物は育ちます。

この太陽こそ、家の中のお母様です。かわいいお子さん方に光と熱と愛情をそそいでやって頂きたいと思ひます。

それには先ずお母様方の健康であります。健康を管理するお医者様であってほしいと思ひます。まず御自身の健康から、考えていきましょう。それには毎日つぎの

- 1 快眠
- 2 快食
- 3 快便

の三つを考えていきましょう。

朝の気持よいめざめで、おいしく食事をします。そしてきもちのよいお通じをする。毎日御自分をはじめ一族の「三快」に気をつけて頂くことが大事なことだと思ひます。それからつぎに「三つの木」について考えてみたいと思ひます。それはまず

- 1 げんき(木)をだし
- 2 やるき(木)になり、そして
- 3 こんき(木)よくつづけること

であります。この三つの木が鼎のようになっていけば楽しい家庭をつくることができると思います。

先日新聞に「百歳長寿者の秘けつ調べ」がでていましたので御参考までにお話ししましょう。

一〇〇歳まで生きる秘訣は

- ・物ごとにこだわらない
- ・くよくよしないように心がける
- ・腹八分に（暴飲暴食をつつしむ）
- ・睡眠を十分にとる。

とありました。一つ一つなるほどな一と思えました。「長生きも芸のうち」とよくいわれています。病気をしないできもちよく、楽しくくらしたいものですネ。

わたしは毎日正しい発声をと心がけています。正しい姿勢になると、正しい呼吸ができます。（自然に腹式呼吸ができます。）

そして楽しい歌をうたってみましょう。春のようなさわやかさが生れてきます。

一家の健康はまず母親から、お母様が健康であれば家中が健康になれると思います。食生活はバランスのあるこんだてをすること。黒柳徹子さんのかいた「窓ぎわのトットちゃん」の中に小林宗作校長先生がおべんとうの時、子どもたちのおかずがかたよらないように必ず海のもの（こんぶ）山のもの（梅ぼし）をおもちになって、海のもの山のものがない子どものおべんとうの中に入れてあげたということが書いてありました。わたしはそれをみた時、この校長先生はすばらしい教育者だと思いました。毎日毎日の食生活をよくお考えになられたとしみじみ敬服しています。

指をつかってあそぶ

「声をだすこと」姿勢を正しくして大きな声をだすと腹式呼吸を自然にすることになります。うたをうたうと楽しくなりますからくよくよしくなくなります。そして、それにもう一つ大切なことは指先を使うことです。毎日の生活でお母様方は朝から指先をつかっていらっしやい

ますね。(しらすしらすのうち)

朝の掃除。お食事の用意。おせんたくなど、おさいはう、あみものなど……

指先をつかうと、頭がよくなるそうです。頭がよくなりませんと、ぼけないそうです。指先で……さわる。ふれる。にぎることができません。不幸にして目のみえない方は、指先をつかっています。指さきは第二の頭脳といわれる理由がおわかり頂けたと思います。

ですから毎日ピアノやオルガンまた楽器をつかう方、そして声楽家のように声をだしておられる方々は自然に健康体になっていることになりますネ。

ここで指あそびの「わらべうた」についてお話ししましょう。

・「どのおせんべいがやけたかな」

・「ずいずいずいころばし」

など無心にうたいながら、あそんでいる「ゆびあそび」

はどなたも御存じのことと思います。

また両手のひらを合わせてあそぶ

「赤ちゃん赤ちゃんなぜなくの」

「子どもと 子どもとけんかして」

などは こゆびと こゆびを合わせながら

「赤ちゃん赤ちゃんなぜなくの(小指)

姉さんミルクをのんじやった(薬指)

兄さんおもちやをとっちゃった(中指)

母さんおでかけもどらない(人さし指)

そこで

父さんブンブンブン」(おやゆび)

とうたいます。

上手にゆびさきを合わせてみましょう。もう一つ「子

どもと子どもとけんかして」は赤ちゃんと同じようにしてあそびます。

てあそびます。

御参考までに、

「子どもと 子どもとけんかして (小指)

薬やさんがとめたけど (薬指)

なかなかなかなかおらない (中指)

人たちゃわらう (人指しゆび)

親たちやおこる（ブンブン）（親ゆび）

というあそびもあります。

また手合せあそびの中には二人むきあってあそぶ。

・「お寺の和尚さん」

「セッセッセーのヨイヨイヨイ」と気持を合わせ、はじめ自分で拍手「オ」「テ」手を開いて向いあった友達の手をたたき、これを

「おてらの和尚さんが

かほちゃのたねをまきました」

までつづけてする。

「芽が出て」お互いに手の平を合せて芽をつくる。

「ふくらんで」ゆびさを合せたままたなごころをふくらます。

「花がさいて」——指さをひらいて花のさくようすをする。

「ジャンケンポン」で勝負をきめる。

これで終りにしてもよいし、なお次のようなあそびに発展すると一そう楽しくなる。

勝った子どもは負けた子どもの手の平に（例右手をと
り）

「一本ばしコチョコチョコ」をして

「たたいて」「つねくって」（つまんで）

「階段のぼって コチョコチョコ」と

わきの下まで「尺とり虫」のように上って行ってコチョコチョコをする。子どもたちは大喜びで何回も何回もくりかえしてあそぶ。

何回もくり返して遊んでいるうちにゆび先はよく動くようになり、あそびも上手になっていきます。なお「わらべうた」は「うたとあそび」とが一語になるものです。離しては「わらべうた」ではなくなります。

お茶の水幼稚園からえたもの

さてお話しはとびまして、わたくしごとで恐縮ですが、東京高等師範学校の附属小学校（現筑波大附小）へつとめるようになりましたのが昭和四年五月からでした。今まで師範学校そして女子校とつとめて参りました

のが、急に小学校へまいりましたので指導のむつかしさを感じました。一生懸命に指導すればするほど子どもたちから離れていきます。師範学校から女学校と指導にはすこしも困難を感じませんでしたのに。そこで私の姉のように相談相手になって貰える戸倉ハル先生に話しました。そこで小学校と幼稚園との関連はかんしていかなければならぬと思うのでお茶の水の幼稚園へ紹介して貰いました。

はじめて伺ったのは六月のはじめでしたと思います。園長はあの有名な倉橋先生でした。倉橋先生は大変お喜びになって「どうぞよくごらんになって下さい」とおっしゃって園の中を参観させて頂き、園児の遊んでいるお庭へつれて行って頂きました。

十人位の園児が「ことしのぼたんはよいぼたん……」と園児は男の子も女の子も手をつないで遊んでいました。わたしははじめてきいたりみたりしたあそびでしたのでとても新鮮な気持になってみました。何回もくり返してあそんでいましたので、しばらくしてから戸倉

先生とかえってきました。それから一ヶ月ほどたった七月のはじめに、また参観にいきました。するとまた、「今年のぼたんはよいぼたん……」をうたいながらあそんでいました。それから二期期中頃いきましたがやはり「今年のぼたん……」をして遊んでいました。わたしはこんなにも「わらべうた」が長つづきをしてたのしい遊びに発展するということをしたたのはこの時でした。そこで小学校の音楽（その当時は唱歌）の時間に取り入れて指導したところ、児童の眼がかがやくようになり、楽しい指導ができるようになりました。

例 三年生の教材の中に「茶つみ」というのがあります。これを手あそびにしてみました。二人むきあって

「なつも ちかづく 八十八や トントン」

と手合せをするので、誰にでもすぐ出来ました。まりつきのうたの時は

「一番はじめは一の宮」とか

「あんたがたどこさ」などいろいろなうたあそびを入れてゆたかにしました。児童は大よろこびで活気にみ

ちた表情で音楽室へくるようになりました。

昔フレーベルが「歌うことに動作をつけておこなわせることは、子どもの活動性をますことである」ということばをしみじみ味わえるようになりました。

わたしのわらべうたの研究はこの時からはじまったのであります。ほんとうにおかげさまだと感謝していただきます。

音痴について

よくみなさまから「子どもが音痴で困ります。パパが音痴なものですから」と、何もごぞんじのないパパに責任をもっていく場合がよくあります。(笑)迷惑をこうむるのはお父さま方です。これは家庭のかんきょうに左右されることが多いと思います。よい音楽を常にきくことが出来るかんきょうがあれば自然になおっていくものだと思います。

お母さまと一しょにうたうと、お子さまの心はなごんできます。「一諸に歌う」ということはなんとすてきな

ことでしょう。またよい音楽のレコードを毎日きかせることも大切ですね。楽器がなかったらば、「手をたたく」これはすばらしい楽器だと思います。または手近にある机でも、お茶わん、コップなどんでもよいのです。またおもちゃばこにある(よい音のでももの)ものでもたのしい器楽合奏になると思います。

昔(昭和のはじめ頃)小学校の先生が師範学校時代に「ピアノ(オルガン)をひきなさいとおっしゃったので、ピアノをみんなで移動させた」といっておられました。が、オルガンもピアノも少ない時代で練習する楽器は少いし仕方なかったことだと思えますが、今から考えると夢のようなお話であります。また少しのけがでも大きくほりたいで巻いて「先生手がいたくてひけませんでした」といって先生におことわりをしたこともあるなど、なんとかして楽器をひかないことを考えたといって笑っていらっしやいました。

みなさん音楽では苦労したようですね。

さて音痴というのは楽器の音からはずれるのです。上

手に歌えないとすぐ音痴といってしまう。

それでは幼児の音域はどのように発達するかについてお話ししましょう。

世界中の赤ちゃんの産声（オギャー）という生のよるこびの音は「一点イ音」だといわれています。この音は大変大切な音です。その音で一年位はないたり、笑ったりアブとお話ししたりしています。それから音はだんだん下にひろがっていきます。つぎに音符で表わしてみましよう。

「NHKの時報の音です」注意しておききになって下さい。ピアノ・オルガン・バイオリンなど、このイ音（A音）で調律します。木琴もハーモニカも皆同じです。

音をきいた時すぐ「イ音」だなーとわかるのととても楽しいですよ。

音域は下の方へと発達しますから、年令によって歌曲をえらんでみましょう。そして楽しくあそんで下さい。

御参考までにつきに歌曲名をあげてみましょう。

例

0歳（1度）

あわわ あわわ
いない いない ばあ

1歳〜2歳（3度）

ちようち ちようち
かいぐり かいぐり
おつむてん てん
なべなべ そこぬけ
ほたるこい

かえるが

かえるが
ゆうやけこやけ

たこさんたこさん

じゃんけん ほん

おせんべいがやけた

なべなべそっこぬけ

3歳〜5歳（4度）

あがりめ さがりめ

たてよ一二

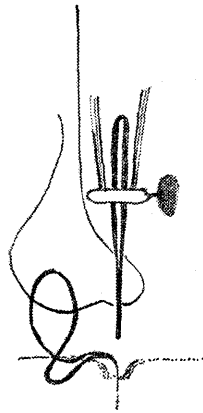
幼児の音域の発達

1年 2年 3年 4年 5年 6年

あがりめ さがりめ あがりめ さがりめ あがりめ さがりめ

ここにしながらかえっていきました。翌日も早くから私のそばへきましたので、昨日のように三四回一しょにうたっているうちに声も出るようになりここにこして教室へかえっていきました。A子さんはどんなにうれしかったでしょう。これで自信ができました。それからはお友達と一しょに大きな声でうたうようになりました。私はほんとうによかったと今でもあの時の感激が思い出されず。

子どもはほめてそだてることが一番だとしみじみ思っています。



〔講演者紹介〕 明治三十四年長野県生れ。東京音楽学校（現・東京芸術大学）卒。東京府立第六高等女学校（現・三田高校）に在職中、戸倉ハル先生に出会う。昭和四年から昭和三十七年まで東京教育大学附属小学校の音楽の先生となる。後、戸倉先生と共に日本女子体育大学教授とられた。体育の戸倉、音楽の小林のコンビで、日本における子どもの音楽リズム教育を躍進させた。お茶の水幼稚園のみどり会夏の研修会では、長年にわたって指導にあたられた。

〔史料紹介〕

『邦訳 日葡辞書』⑧

——わが国中世の児童文化史研究によせて——

M・M・M

M字で始まる語

マホリ(守り)

首にかけて持つ守り袋、あるいは、聖なる物を入れた袋。

ママチチ(継娘)

継父。

ママコ(継子)

継子。

ママハワ(継母)

継母。

ママムスメ(継娘)

継子である娘。

ママテテ(継父)

継父。

マナビ(学び)

模倣、または、学習。

マネビ、ブ、ウダ(まねび、ぶ、うだ)

まねをする、似せる。

マエガミ(前髪)

日本の子どもが伸びるままにして、顔の上へ垂らしている

額髪。

メコ(妻子)

妻と子と。

メクラドリ(盲取り)

目隠しをして人を捕える遊び。

(例) メクラドリヲ スル(盲取りをする) この遊戯をし

て遊ぶ。

メナンドリ(目無取り)

盲取りのこと。

メノト(傳・乳母)

傳育役、または、乳母。

メノワラワ(女の童)

奉公する少女。

メラウ(女郎)

若い女の奉公人。

メラウ(女郎)

女を卑しめて、侮蔑して言う語。

ミドリゴ(嬰兒)

四、五歳までの幼児。

ミシケ(みじ気)

脾臓の病気に似た、子どもの病氣。

1) 日仏辞書には赤痢の一種とある。

ミマネ(見真似)

見てまねをする、または、模倣する。

ミミ(身々)

(例) ミミト ナル(身々となる)お産をしてしまうこと。

ミモチナ(身持な)

妊娠している(女)。

ミナライ、ウ、ウタ(見習ひ、ふ、うた)

見て学ぶ

ミナシゴ(孤子)

孤兒。

ミヲエ(実生へ)

種子から生えた木。

(比喩) コノモノハ、ワガ イエノ ミヲエチャ(この者は我が家の実生ぢや)この若者は我が家で生まれた。

ミセブラカシ、ス、イタ(見せぶらかし、す、いた)

子どもに對してするように、何か物を見せては隠す。

ミシャウ(未生)

(未だ生まれず)生まれる以前。

(例) ミシャウ イゼン(未生以前)生まれる以前

ミヤ(宮)

国王の子。

ミヤバラ(宮腹)

国王が子どもを生ませた婦人で、王妃ではない人。

ミヤストコロ(御息所)

すでに王子を産んでいる王妃。

モダシテシリ、ル、ウタ(黙して知り、る、った)

一言も物も言わずにだまって居て、師の説明するのを聞いて、それを学び取る。

マウケ、クル、ケタ(儲け、くる、けた)

利を得る、または、取得する

コヲ マウクル(子を儲くる)ある人に子どもが生まれる

緑蔭号と名づけて、八月号を幼児教育とは直接に関係のない読書のすすめとしてから、もう二十年以上になると思う。幼児教育は成長しつつある人間を相手にするのだから、狭い考えに閉じこもらないで、広く人間のことを考える時を養いたいと思う。

緑蔭といえ、樹木の蔭での読書である。春早いころから樹木の緑は一週間ごとに変化して夏には濃い緑となる様は、世俗のことであくせくしている私共の神経を休ませてくれる。先日、お茶大で生物学の教授をしておられた大槻虎男先生ほか数人の長老教授においで頂いて、大塚のお茶大構内の植物について実地にはなしを伺った。その記事は間もなく本誌に掲載されるが、同じようにみえる樹木の緑にも、さまざまな面白さがあることに気付かされた。附属幼稚園の園庭に、にわとこや菩提樹の木があることもこのときに教えられた。また旧約聖書に出て

くるアブラハムのモレのテレビンの木とは何なのか、それと縁の深い珍しい樹木がお茶大の中にあることも、三十年もこの中を歩きながらはじめて教わった。そのあと、大槻虎男著『聖書の植物』（教文館）を送って頂き、パレスチナの植物をひとつひとつ実地にあたって植物学上、また聖書との関連で詳しく解説されているのを実に興味深く読んだ。宗教や思想も、緑蔭と共に理解するとき具体的に人間のこととなるように思った。この著者はすでに八十歳の高齢であるが、数年前にこの書物を出版され、なお、次の著作に従事しておられる。晩年の未来は人生の完成の時であることを思わされた。

緑の樹木はだれをも拒まない。近寄ってくる人を、だれでも受け入れてくれる。樹木に寄りかかると心が和む。夏の日の下、緑蔭の読書は貴重である。

(津守)

幼児の教育 第八十二巻 第八号

八月号 © 定価二七〇円

昭和五十七年七月二十五日 印刷

昭和五十七年八月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行人

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

●本誌御購読についての御注文は発売所
所 フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良品がございましたら、おとりかえいたします。

好評発売中

幼児を のばす 指導のポイントシリーズ(全10巻)

微妙で大切な保育の坎どころを、がっちり読みとろう！

子どもたちに豊かな保育をと心をくわいておられる先生や、子どもがよくわからない、きっかけがつかめないと悩んでおられる先生へ、本シリーズは生きた指導の実例を提供します。保育の原点に立ちかえり、保育の考え方、子どもの見方、指導の方法などを点検して、子どもの心を読みとり新しい遊びへと展開してください。

- ① 保育の視点 - ここがポイント 海 卓子・著
- ② 指導計画 - ここがポイント 高杉自子・著
- ③ 絵画の指導 - ここがポイント 林 健造・著
- ④ 音楽の指導 - ここがポイント 早川史郎・著
- ⑤ 体育の指導 - ここがポイント 三宅邦夫・著
- ⑥ 自然の指導 - ここがポイント 小山孝子・著
- ⑦ ことばの指導 - ここがポイント 阿部明子・著
- ⑧ ごっこ遊び - ここがポイント 笠間典美・著
- ⑨ 園行事 - ここがポイント 仲田あつ子・著
- ⑩ 母親対応 - ここがポイント 本吉圓子・著

B6判・セットケース入り・セット定価 9,600円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

好評発売中

幼稚園教育早わかり一問一答

文部省幼稚園教育課内 幼稚園教育研究会 編著

推せん・文部省初等中等教育局長 三角哲生氏

幼稚園教育の内容から法令にいたるまでの総合的なガイドブック誕生!!
本書は、豊かな幼稚園教育のために、その内容から法令、通達にいたるまでの諸問題を、文部省幼稚園教育課の研究会メンバーが総力を挙げて懇切丁寧に説きあかした画期的なガイドブックです。
幼稚園教育の向上をめざす人びとにとって、本書はまさに必携の一冊といえますしよろし。

A5判・276頁・定価1,200円